

夏の青さに

詩葉

忙しなく聞こえる蝉の声。
じりじりと照り付ける太陽。
走り出す靴音。

忘れていたあの記憶が思い出される夏の日、空の色は何色だったろうか。

1

八月一日。

夏真ただだ中、昼間にも関わらずカーテンを閉め切った薄暗い室内には壊れかけのクーラー音が忙しく音を立てている。

ワンルームの部屋には衣服や書類が乱雑に置かれた足の踏み場もない床に、小さな一人専用のテーブルと座椅子、やや大きめのベッドだけがあり、その木でできたベッドの上で寝転がっている人間が一人。

寄れてしわくちゃになった灰色の半そでパーカーに同じ色のスウェット、だらしない寝間着姿で横になりながら夢中になってスマートフォンを操作している彼の名前は湯川渉(ルビ・ゆかわわたる)。今年、地元の宮城を離れて東京の専門学校に晴れて入学を果たした十九歳の男である。

彼は幼少期からの夢だった漫画家という職に就くため、その専門知識を身に着け、あわよくばプロへの道を歩めるかもしれないと思い、こんな日本の大都会まではるばる来たがその苦労はつい最近無駄になった。

今日は水曜日。平日の真昼間に堂々と自室で寝転がりながら電子端末をいじっているのは、彼の専門学校が本日休校だからというわけではない。現に今日、他の学校なら夏休みに入っている時期にも関わらず朝早くから電車に乗り、涉のクラスメイト達は勉強にいそんでいる。では何故、病に伏しているわけでもないのに彼は怠惰な態度をとっているのだろうか。

事は一週間前に遡る。

「なんかもう無理な気がする」

そんなふわつとした言葉を吐いて、彼は専門学校を自主的に退学した。決断から決行までわずか数分という速さである。その行動力をもっと他のことに活かせることが出来たら良かったのだが、彼が選んだのはこちらの未来だった。

しかし後悔していいわけではないらしく、時々、無為に過ごす時間が苦しくなり情けなく泣いてしまう時も無いわけではない。が、一度寝て起きるとやってしまったのは仕方ないと開き直り結局、今日も新聞配達のアルバイトをしてスマートフォンを見て生きていく生活を送っている。

部屋に散らかった学校の書類や授業で使う画材は今や死んだかのように何も言わず渉をじっと見つめていた。

昔から絵を描くことが大好きで、周りの人にもそれなりに評価をされていた渉は小学校や中学校を経ても変わらず絵が大好きだった。しかし、高校に入ると途端に、知らない人間との出会いが増え、その中には渉よりも絵の技術や表現のセンスが上の人間がいた。

自分が井の中の蛙だったと知ったのはそれが初めてで、それでも渉は漫画家になることを諦めようとはしなかった。何故なら、彼は小学校の頃から周りに絶対に漫画家になると言い続けて生きてきたのだから。

半分、見栄のようなもので東京の有名な専門学校に入ると、そこには高校の時とは比べ物にならないくらいに化け物のような人間が沢山いた。渉の削れて細くなってしまう心の芯がぼつきりとそこで折れたのだ。

専門学校を辞めても地元に戻ろうとしないのは、あれだけ絶対になると言っておいて一年ほどで諦めた情けない自分を誰にも見せたくなかったからである。だから、学校をやめたことは地元の友達にも言うてはいない。これでしばらくは何も言われずに済むが、その代わりにいずればバレてしまうという恐怖が新たに渉に付きまとい始めた。

こうして現実逃避にネットサーフィンを繰り返す渉は、もう戻れないところまで来ていた。

「もつといいバイト探さないとなあ……………」

ぼやくようにそう呟いた渉はスマートフォン画面に指を滑らせながら【東京 アルバイト 楽なの】と検索窓に打ち込んだ。窓の右側についている虫眼鏡のマークをタップすると何百件もの項目が出てくる。

【超簡単 商品の梱包配達をして日給一万円！】

【日雇い 会場設営バイト】

【広告を見るだけで一時間二千円】

しかし、どれだけ画面をスワイプして流れてくる文字に真摯に向かい合おうとも、どれも怪しさ満点のものや気に入らないものばかりで、今日も新しい収入源は得られそうになかった。

そうこうしているうちに、時計の短針は数字二つ分進んでいた。カーテンで閉め切られた部屋は、本格的に暗くなり始め、もう直ぐ夜が訪れることを感じさせる。

「はあ、飯買いに行くか」

今夜食べるものが底を尽いていたことを思い出した渉は、なけなしのお金が入ったほつれのある長財布を持ち、気怠そうに足の踏み場もない床を超えて玄関を出た。扉に鍵をかけ

るとガチャツと小気味良い音が響く。外は沈みかけの夕日が、赤々といわし雲の浮かぶ空を照らしており、吹いてくる風は生温く夏の気配がした。

渉が一人暮らしをしているアパートは三階建てで、建物自体が少し高い丘の上に建っているため、都会の街並みと広がる空がよく見える。しかし一人暮らしを始めた当時、気に入っていたこの景色も今や見慣れてしまっていて、とうの渉はなんの関心も示さなくなっていた。

錆が少し貼り付いた外付けの階段を降りていくと、ふわりと美味しそうなカレーの香りがして渉は振り向いた。おそらく何処かの部屋で誰かが夕飯を作っているのだろう。

「今日はカレーにしようかな」

特に何を食べるか決めていなかったのもあり、渉はそう呟きながら階段を下まで降りて行った。

夕食はいつも歩いて一、二分ほどしか要さないほど近くにあるコンビニで買っている。アパートのある丘に備え付けられた短い階段を下り、住宅街に挟まれた人が一人通れるくらいの小道を進む。道の脇にある家はだんだんと明かりがついていき、きゅきゅと声を上げる子供やそれを優しく注意する母親の声。犬の吠えた声や父親と思わしき男の人の「ただいまー」の声。

それはとても幸せにあふれた日常を具現化したようなものだった。

もう半年。宮城から出てもう半年が経っているが渉はその間、一度も家に帰ったりはしていない。帰る時間がないほど学校の授業数が多く、バイトも学費や生活費を稼ぐため、ほぼ毎日働いていたからである。世間では夏休みだというのに渉の学校は完全に休みにならないうあたり、流石の有名校と言ったところだろうか。

せつかく自分の時間ができたというのに地元へ帰ることが出来ない渉は、住宅街にある一つ一つの家庭を思い浮かべては羨ましいなと思った。

そんなことを思いつつも歩き続けて、ようやくと渉は住宅街の小道を出て少し大きめの道路に出た。ここを右に曲がれば二つ建物を超えた先に、いつも通っているコンビニエンスストアがある。車通りも滅多にない道路だが、真ん中を堂々と歩くやつはいない。渉は端の方を歩きながら煌々と明かりを放つ建物に着いた。

案の定、入り口の蛍光灯には蛾といった羽虫たちが群がっており、嫌でもそこを通らなければならぬ。

虫という虫がこの世から三番目くらいには嫌いな渉は、冷や汗を地味にたらしながら店内へ入っていく。

「ひえあっ!？」

通ろうとした瞬間、着ているパーカーのフードに何かが入った気がして入り口で奇声を上げてしまった。当然、周りいたお客さんや店内にいる店員は、突然声を上げた渉に驚き目を丸くしている。それもそのはずだが当の本人はそれどころではなく、ばさばさとフードを忙しなく裏にしたり表にしたりしてその何かを逃がそうとしていた。

「……あれ？」

しかし何回かそれを繰り返してみても虫の足一本、羽の一欠けらもなくフードは何も変わった様子がないことに気付く。

結局は、コンビニの入り口で突然奇声を上げて、おかしな行動をしていた人と思われなかった渉は恥ずかしいという気持ちを顔面に表わしながら店内にようやく入っていった。店内は渉の身長より少し高めの棚が整列しており、相変わらず選り取り見取りという感じで、ここへ来れば大抵のものは揃えられるのではないかと思うほど種類の多い商品が所狭しと陳列していた。購買意欲を大いにそそるパッケージの誘惑に負けそうになりながら、渉は先ほど決めた今晚の夕食、カレーを探すため完成された料理が並んでいる場所へ向かう。

夕飯時で残っている商品は多くなかったが、お目当ての商品が一つだけ残っていた。おふくろの懐かしいカレーライス。そう、パッケージに書かれた商品を手に取り、適当に飲み物をとってレジカウンターへと進む。カウンター傍にあるお菓子たちがこちらに視線を注いでくるのに耐えられず、結果的に渉がカウンターの上に出したのはカレーライスとエナジードリンク、ポテトチップスの三つだ。

「温めますか？」

「あ、お願いします……」

先ほどのことを引きずり、羞恥心を残した表情で渉は答える。

カレーライスがレジ後ろにある電子レンジに入れられ温められている間、レジに表示された金額を見ながら渉は長財布からお金を取り出していく。いかんせん所持金が心もとなく、小銭だらけだった渉が出したお金はほとんど十円や一円といったもので、それを出すのも数えるのも時間がある。

総額ピッタリのお金を受け取り終え、レシートを渡した二十代くらいの若めの男性店員は電子レンジからカレーを取り出し、透明な包装紙に包まれたプラスチック製のスプーンとおしぼりを一緒に袋に入れて渉に手渡した。

「ありがとうございますー」

淡々とした口調でそう告げる店員に、ぺこりと会釈し渉は店の出口へと向かった。ウィーンと音を立てて両開きに開かれるドア。頭上には日が落ちて外が暗くなったことにより増えた羽虫たちが狂気乱舞している。

そこを急いで通り抜け、コンビニの敷地内も出て住宅街の通りに出た。

空はだいぶ暗くなっていて、どこからかヒグラシの鳴く声が聞こえる。道路脇に直立している電灯の明かりがついて、街は夜を迎える準備を始めていた。

「はあ……明日にはバイト見つけないとなあ……」

そう独り言を呟きながら来た道を戻っていく。温められたカレーライスから漂ってくる食欲を誘う匂いに渉の腹がなんの抵抗もなく住宅街に鳴った。

翌日。

あいも変わらず清潔という文字が一切みられない部屋の中、ベッドで昼過ぎまで眠りかけている渉の耳元に軽快な音が届いた。その音は渉が隣に置いたスマホから鳴ったらしく、誰も触れていないのに画面にはメッセージがポップアップされている。

被った薄地の布団の中でもぞもぞと動いて呻きながら、渉は目を瞑ったままスマホに手を伸ばす。

「まじかよ……」

寝起きで開いているのか閉じているのかよく分からない目が見開いた。渉が右手で握りしめているスマホには、とあるグループへの招待を知らせるメッセージが浮かんでいる。

【第五十一期卒業生同窓会】と書かれたそのグループには、渉が小学六年生の頃に同級生だった面子が綺麗に名前を連ねていて、懐かしさと共に若干の後ろめたさを感じた。あの頃は毎日、好きなことをしていて、友達のみならず先生や親といった多くの人たちに自分の絵を見てもらっていた時期だ。

クラスの中でも割と中心的な位置だった渉は、恐らくほとんど全員に『絵を描いていた人』として覚えられているだろう。

同級生の一人、もう名前も覚えていない子が渉に「漫画家になろうよ！」と言葉を投げかけてきたのがきっかけで、漠然と漫画家になりたいと思いだしたのもその頃だった。

だからこそ一番、将来の希望もあつたし夢を絶対叶えられると思っていたから、誰に聞かれても絶対漫画家になるとしか答えていなかったのだ。

今やそんな希望に満ちたあの頃の渉は見る影もない。彼は当然のように同窓会グループの招待をキャンセルする項目をタップした。

「日向(ルビ・ひなた)には悪いことしたかな……」

同窓会グループがシュポツと音を立ててグループ欄から消えていくのを見ながら静かに呟く。

彼の言う日向という人物は、先ほど渉に同窓会グループへ招待してくれた女の子であり、言わずもがな渉の同級生である。彼女は小中高すべてが渉と同じ学校で、今でも時たまに連絡しあうような仲だった。

『日向ごめん同窓会は学校とバイト忙しくて行けないや』

一番付き合いが長くて仲が良い日向にすら渉は嘘を吐いた。罪悪感がそういつた嘘を吐くたび、自堕落な生活を送る度に押し寄せてくるのだ。

どうしようもないと諦めた自分自身に呆れて、渉はため息を吐いた。

八月三日。

自室で脱ぎ散らかした服の上に座り、もはや物置場としての機能しか果たしていないミニテーブルの上に置かれたカップ麺を啜る午前十時。渉はいつものようにスマホで楽なバ

イト先を探していた。

「やっぱ世の中甘くねえよなあ……」

ぼやきながら画面をスワイプしていく手は慣れたもので、ろくに画面を見ずにどんどん上へと文字が流れていく。

「検索の仕方変えたらいいのあるかな」

そう言っただけで指を滑らせて検索窓が表示される上部まで戻って来た。そうしてもっと条件に合いそうな言葉を選びながら文字を打ち込んでいく。

【東京 バイト 給料が高くて楽なの】

本気でお金を稼ごうとする気のなさそうな文章が出来上がった。そしてなんの迷いもなく虫眼鏡のマークをタップしようと涉は画面を押す。

しかし、押した瞬間表示されたのは検索結果先の項目ではない、文章と文章が交互に表示された画面。これはメッセージアプリの画面だと咄嗟に気づいた涉は、今起こったことについて一瞬で理解した。

どうやら虫眼鏡のマークを押そうとした瞬間に誰かからメッセージが来て、その通知を誤ってタップしてしまったらしい。

「やべ、既読つけちゃった……」

いつも内容を確認してからトーク画面を開く癖がついている涉は、いきなり内容を確認せずに見たことを記す『既読』をつけてしまったことを悔やんだ。既読というのは相手にも伝わるため、早く返信をしないといけないという謎の焦燥感に陥る。

とりあえず内容を確認しながら返信しようと試みかけて、涉の手が止まった。

『今からそっちに行くね』

トーク画面の最新メッセージにはそう書いてある。

そのメッセージを送ったのは、昨日、涉を同窓会グループに招待してくれた泉日向(ルビ・いずみひなた)だった。

足の踏み場もなかった床が久しぶりに顔を出して、カーテンがかかっている窓から差し込む暖かい光に照らされると涉の部屋は見違えた。

「は〜〜！ たまには掃除もいいなあ〜〜！」

とりあえず散らかった物は袋に詰め込み、今までで一、二度しか開けることのなかったクローゼットに押し込んだだけで掃除をしたとは言い切れないが涉は清々しい表情で床に倒れている。

スマホを起動して時刻を確認すると十二時半近い。日向が来ると言っていたのは十二時ちょうど。割とぎりぎりだ。

「……女子が部屋に来るのなんて小学生の時以来だな……」

ぼそっとそう呟くと何かに気付いたのか突然起き上がり、洗面所へと駆け込んだ。

「こんな髪型で引かれないか!? 本当にこの恰好で良いのか!? いやでも、これが一番良いと思うし……」

わたわたと慌てて身だしなみを気にし始めて、その場にあったあまり使用していないワックスを取り敢えず出してみて、出しすぎて髪がべとべとになった。

さらに慌てふためく渉の耳元に、玄関の方からチャイム音がした。

「き、きた……」

到底、友人が訪れた時のような反応ではない。

「い、いま出ます」

ワックスを適当に着けて、洗面所から出てすぐの玄関へどたどたと足音を立てながら向かう。渉の鼓動はものすごい音を立てて、玄関のノブにかけた手は冷や汗をかいていた。

何故、あの渉が掃除をしてまで日向を迎えているのか、本来なら現況を知られたくない渉は日向の訪問を断るべきなのだが、彼には極めてくだらない理由があつて断るのに至らなかった。

小中高ともに、いたつて普通に生きてきた渉だったが、一度もお付き合いたいというものをしたことがなかった。しかし誰かと付き合いたいという思いはあつても、異性との関わりは昔馴染みとの会話ぐらいしかなく、その昔馴染みという日向とも友達より上に発展したことがない。

しかし、今回そんな彼女から『今からそっちに行くね』という文が来たのだ。

これはほぼ脈ありと言つてもいいのではないだろうか、あわよくば付き合つてしまえたりするのではないだろうか。

そんな下心ありありの浅ましい考えで、渉は突然の連絡にも関わらず、うきうきで部屋を片付け、頭をべとべとにしたのだ。

ガチャリと小気味よい音をたてて扉を開けた先には、久しぶりに顔を合わせた懐かしい友人が――二人いた。

「……へ？」

日向と隣にいるもう一人を交互に見て渉は困惑する。

「久しぶり! 元気してた?」

髪を短くツインテールに結んでフリルを沢山あしらった可愛らしい淡い桃色のワンピースに身を包んでいる女の子は、明るい笑顔を咲かせて元気よく挨拶してきた。

「ひ、日向久しぶり。……えっ……とお」

渉は日向の隣で腕を組みながらこちらを睨んでいる女の子を一瞥して声のみ込んだ。

腰まであるさらさらの黒髪、身に着けているのは白シャツに黒のアウトター、そしてデニムのハーフパンツとカジュアルだがどれもブランド物だ。

「なにその恰好だっつさ」

黒髪の少女は渉を睨みつけたまま刺々しい言葉を放った。

「はぁ！？ だっ……ださ！？」

普段は服選びに時間を取らない自分が、何十分か考えあぐねて選んだ服装をそんな一言で一蹴されるなんて思わなかったのか、渉は怒っているような戸惑っているような表情をして固まる。

「服はよれよれだし配色のセンスも無い。おまけにどこで買ったかわからない変なロゴつきのシャツ。これのどこがださくないっていうの？」

「あっ……ぐう……」

あまりにも的確な指摘に渉は、先ほどまでの自信に満ちていた自分が恥ずかしくなりだして、ついには言葉も出なくなった。

「あ、あの涉くん！ 私はださくても気にしないから大丈夫だよ！」

そしてなんのフォローにもなっていない日向の言葉がとどめに突き刺さる。

「……………」

渉はもはや玄関に座り込んでしまつて、顔を上げようとしなない。小さく鼻をすする音が聞こえてきた。

「日向は割ととどめ刺しがちだよね」

「え！？ そ、そんなことは……」

一分ほどの沈黙が続く。

「……………」

渉は玄関にうずくまつた状態でぼそぼそと何かを話した。

「ん？ なんか言った？」

黒髪の少女が腰を落として渉の声に耳を傾けようとした瞬間、急に渉が顔を上げた。

「なんでお前がここにいんだよ瀬奈(ルビ・せな)！」

突然大声で名前を呼ばれて黒髪の少女——宮野瀬奈(ルビ・みやのせな)は驚いて後ずさつた。

「な、なんでって——」

「私と呼んだの！」

瀬奈の言葉を遮るように日向が前に出て言う。

渉はそれを見てほかんと口を開けて呆けていた。

玄関先でいつまでも話を続けても近所迷惑になるということで、自室に二人を案内した渉は当初の予定とは違うことで緊張していた。

あわよくば付き合えるなどと夢見がちなこと考えていた自分を殴りたいぐらい、彼は今日向の連絡に返信したことを後悔していた。

一人で使うには十分だが三人ともなると渉の部屋にあるミニテーブルは少し窮屈だ。渉は気を使って自分はベッドの方に座るからと二人をテーブルに促したところまでは良かった。

た。

昔馴染みと言ってもあまり異性と接点がない渉が一度に二人と話をしなければならぬという状況。これは下手なことをしたら渉の沽券に関わるほど重大なこと。特に瀬奈がいるとなると難易度も変わってくる。

彼女はいわゆるクラスのカーズト上位みたいな子だった。家がお金持ちということもあり、わがママが服を着て歩いているかのような振る舞いはとても有名で、いつも誰かを振り回している。

日向とは違い、小学校の頃しか渉との接点はなかったがそれでも強く印象に残っているほど彼女は扱い難い存在であると渉は認識していた。

「とりあえずお茶でも……」

「いいよ、要件すんだらすぐ帰るから」

不愛想な表情で瀬奈は断りを入れると、日向に目で合図をした。

日向はそれを見てぎゅっと手を握り、つばを飲み込んだ。

「あ、あのね……渉くん……」

そうしてただどどしく言葉を紡いでいく日向を渉たちは真剣な表情で見ている。時計の秒針が進む音と消え入りそうなほど小さな日向の声が場を制している。

「同窓会……来れないの……?」

なんとなくそんな話題が来るんじゃないかと渉の中で確信していただけに、あまり驚かなかったが渉は内心、「そんなこと言うためにここまで?」と思っていた。

「あ……うん。いけない……ほら、学校があるからさ」

メッセージで送ったような理由で行けない事を話す渉。しかし、それを聞いた瀬奈は訝しげに眉をひそめた。

「学校? もう夏休み入るでしょ?」

「いや違うんだよ。うちの学校、少し厳しくて夏休み期間も学校行かなくちゃいけない日があるんだ」

それは本場で、今日も渉と同じクラスだった人たちは学校へ行っている。でも瀬奈は未だに眉をひそめて渉を見ていた。

「そうだったとしても同窓会の日ぐらい休めないわけ? そんなに私たちに会いたくないの?」

核心を突くような言葉に、渉は内心焦った。

今の現況を知られたくないから同窓会を断ったのに、断ったせいで直接会いに来られてはたまったものではない。しかも、ちょうど一番聞かれたくないところを問いただされている。

「そんなことねえよ……」

心情は会いたくない。というよりも知られたくないと言った方が適切だろう。渉は、嘘は言っていないと自分で確かめてから否定する。これ以上、余計な嘘で己の首を絞めたくない。

ったからだ。

「へえ……」

瀬奈は冷たい目で渉を見据えている。そして肩から下げられた財布とスマホぐらいしか入らなさそうな小さいバッグから、きらきらとデコられたスマホを出して。

「実は私の高校の友達があんたと同じ学校に行ってるんだよね」

渉にその友達と思わしき人物とのメッセージ履歴を見せた。

そこにはお互いの共通の知り合い——渉についての話がされていた。初めは共通の知り合いがいることに喜ぶメッセージが続いていたが、しだいには悪口とまではいかないが渉をいじるような会話が少しずつ増えている。

「なんだよこれ……」

「あー違うそれじゃない」

「絶対わざとだろ……」

瀬奈はスマホをスクロールするともう一度、渉に見せた。メッセージ欄の日付は割と最近のもので、やり取り自体が最新のものになっていた。

そこには渉が学校をやめたというメッセージとそれに対する瀬奈の反応が書かれている。バレていたのだ。渉が学校をやめたことなどとつくに。

渉は大きく目を見開いて肩を震わせていた。必死につきたくもない嘘について自分を保ってきたのが、まるで馬鹿みたいに思えて、馬鹿にされたように思えて、少しの悲しさと大きな怒りが渉のすべてを飲み込んでしまふような勢いだった。

よく見れば同窓会のグループに誘われる前にそのやり取りはされていた。つまりは、学校をやめたと分かったうえで同窓会に誘われたのだろうか、真意を確かめるべく渉は日向の方を見た。

「……どうしたの？」

彼女は何も知らないようすで首を傾げた。

日向の方を驚いたような顔で見ている渉を、瀬奈は頬杖をつき口元を隠して伺っている。

「……なんでも、ない」

「？ 今、何を見せられたの？」

日向の純粹な問いに、瀬奈はいかにも善意ですという表情を浮かべて彼女にスマホを渡して先程の内容を見せようとした。

「日向、これ——」

「やめろ!!」

渉の悲痛な声が部屋に響いた。

余計なものがすっかり片付けられたお陰でよく響き渡る声で怒鳴られた瀬奈は目を丸くし、日向も同様に固まっている。

冷や汗をだらだらと流して、仁王立ちでベッドに立ち尽くす渉とそれを見て困惑する瀬奈と日向。しばらくの間、沈黙が続いた。

時計の秒針を刻む音がやけに大きく感じて、渉はもう一度口を開いた。

「やめてくれ」

今にも泣きそうな情けない顔をして、握った拳にはやり場のない怒りと悲しみが満ちていた。そんな状態で懇願する渉を見て、瀬奈はいつも通りの厳しい目つきに戻ると立ち上がった。

「は？　なんでそこまでして隠すの？　別にいいじゃんもうたかが知れてるでしょ」

そう、もう大切に隠していたものを暴かれてしまったのだから、もう公にしてしまえば楽になるだろう。そんなことは渉自身もよくわかっていた。

しかし、どうしても彼女だけには、日向だけには最後まで知られたくなかったのだ。

『――絶対、約束だよ』

幼い頃の光景が渉の脳内を埋め尽くしていく。それは日向の言葉だった。

小学生の頃、漫画家になるという夢を持つ渉を見て、日向は自身の夢を持つようになった。それは声優になること。声のみで喜怒哀楽を表現し、声のみで命を吹き込んでいく大変で大切な仕事だ。

日向はいつか見たテレビアニメや、傍で夢を追いかけている渉を見て全力で声優になるために努力してきた。今現在、地元の宮城で声優の専門学校に通うために就職をしてお金を稼いでいる彼女は、未だに夢をきらきらと輝く星の様なものだと思っている。

そこまで頑張るわけは他でもない渉との約束にあった。

『いつか俺の描いた漫画がアニメになった時、日向が声をあててくれよ！』

『もちろん！　絶対、約束だよ』

それぞれの夢が重なり合って、それが彼らの夢となった。恐らく渉を一番に応援しているのは日向であり、日向を一番応援しているのは渉だ。二人はお互いを励ましあいながら、夢に向かって努力していた。

つい最近までの話だが。

互いの夢がつながった結果、それは夢へ挫折した者――渉の足かせとなった。彼にとってその挫折を一番に聞かせたくなかったのは、言わずもがな日向である。

「頼む……瀬奈……」

その声はひどく震えていて、渉は辛そうな表情を見せた。

「……このままじゃあんたも日向も」

瀬奈は渉のその表情を見ないように視線を下にずらして言葉を言いかけた。

「――日向、渉は夢を諦めたらいいわ」

しかし、次に出た言葉は明らかに今までのものとは脈絡がなく、よりにもよって一番最悪な展開を迎えそうな告白だった。

「え……？」

案の定、日向は目を大きく開き、信じられないという表情で渉の方を見ている。

「……」

それに耐えきれず、渉は俯いた。

「……あ、あきらめたの……?」

若干上ずった声で確かめるように聞く日向。しかし、渉は何も話さず俯いたままだ。

「ね、ねえ……私、がんばってたんだよ……? 毎日仕事して、夢を叶えるために頑張ってたよ……?」

「なのはどうして——」そんな言葉が紡がれようとした瞬間、渉は大きく口を開けて。

「俺だって頑張ってたよ——!」

下を向いたまま叫んだ。

ぼつぼつと雨のように水が渉から降って、ベッドのシーツに染み込んでいく。

「はあっ……俺だって諦めたくなかった——!」

血管が浮きあがるほど握りしめられた両拳はがたがたと震えている。

「でも無理だった! 俺じゃあ、駄目だった! 才能なんてこれっぽっちもなくて! 馬鹿みたいに夢ばっか語って——!」

ぼつぼつと降っていたものがぼたぼたと音をたてるかのように零れ落ちていく。渉の顔がある真下は、すっかり涙で濡れていた。

「……ひっぐ……夢見てたのが馬鹿みたいだ……俺も。……お前も」

お前も。その言葉を聞いた瞬間、日向はあまりの悲しさに涙が溢れて止まらなくなった。

「……そ、そんなごど……まだ、私は……うぐ……」

何か言いかけて、嗚咽が抑えきれなくなつて、日向の言葉は途切れた。

瀬奈は日向を抱きしめてなだめる。そして渉の方を睨んだ。

軽蔑、怒り、悲しみ、そんな感情が入り乱れたような部屋の中で久しぶりに再開した友達と再開を喜べずに、渉の「帰ってくれ」の一言で二人は帰って行った。

玄関の扉が閉まる直前。

「最低」

と言い放った瀬奈の声が、渉の脳裏に焼き付いて、泣きじゃくって過呼吸になりかけた日向の姿も重なって、渉はどうにも出来ないやるせなさでいっぱいだった。

「……くそっ!」

感情のままに右拳で壁を殴る。じいんとした傷みが広がって、でも涙でふやけた心には何も刺さらなくて、それがどうしても嫌で何度も何度も繰り返して渉は壁を殴り続けた。

ガシャン

壁の中からなにか物音がして、渉はなんとなしに顔を上げる。すると、壁だと思っていたものは実はクローゼットで、そのクローゼットから中に詰め込んだものが勢いよく飛び出してこようとする所だった。

「え」

渉よりも背の高いクローゼットから溢れ出す様々なものたち、それに押しつぶされる渉。

幸いその中から顔を出せたのは良かったが、息を着くまもなく後から降ってきた画材セツトが頭に直撃した。

そうして渉の意識は朧気になってどこかへと行ってしまおうような感覚に陥った。

「じゃあ颯人(ルビ・はやと)、この問題の答えを書いてくれ」

宮城県仙台市にある喧騒から離れた場所に建つ小学校の一つの教室に、**崎川颯人(ルビ・**

さきかわはやと)、宮野瀬奈、泉日向、湯川渉がいた。

「はい、先生」

黒縁の四角いメガネをかけた賢そうな男の子、颯人は担任の先生に従って黒板の前に立つと、すらすらと白いチョークで導いた答えの数字を書いた。

お昼休みが終わり、眠たくなってくる午後の算数の授業。

後ろの席から二番目、瀬奈は欠伸を隠そうともせず、眠たそうなだるそうな表情でノートに板書している。その隣の席にいる日向は、いたって真面目にノートをとっているが少し遅れているようで、焦りながら文字を書いていた。

教室の一番後ろ、瀬奈の真後ろには渉がいびきをかいて寝こけている。

それがこの教室の普通らしく、誰も渉のいびきを咎める者はいない。しいていえば先生がいつも通り眉をひそめるばかりだ。

無事、合っている答えを書き出した颯人は自席である渉の隣、日向の真後ろの席へと腰掛けた。

「渉、もうすぐ授業終わるよ」

コソツと耳元で颯人が言うのと、渉は突然目を見開いて急いでノートを取り出し始める。

その様子を颯人は困ったような笑っているような微妙な顔で見ている。

そうこうしているうちに授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、教室は一気にざわめきが強くなった。

「あー！ ちょっと待って消さないで！ まだ書いてる！」

本日の黒板消し係のクラスメイトに渉が大声で呼びかけると、日向はどこかホツとしたような表情をした。

どうしたのかと日向の手元を覗き込んだ瀬奈は、ああと納得する。

「日向、渉が止めてくれてよかったわね」

クスツと笑いながら瀬奈は顔にかかった黒髪をいじった。

「う、うん」

真面目に書いていたはずなのに、授業が終わるまで板書が間に合わなかった日向は丁寧な女の子らしい可愛い字で、残りの文字をノートに写した。

「渉、そういえば次の授業の宿題やってきた？」

「へ？」

次の六時間目の授業で使う国語の教科書を準備しながら、颯人はなんとなく聞いてみた。渉はそれに対して口をぽかんと開けたまま、首を横に振る。

「怒られる？」

「多分……ね」

「なに？ 宿題忘れてきたの？ 宿題自体を忘れてたの？」

渉と颯人の会話を聞いていた瀬奈が話に入ってきた。

「宿題自体知らなかったし、教科書もノートも忘れてきた……」

渉の返答に颯人と瀬奈は頭を抱えた。

ただ、そんな状況にも関わらず当の本人はあっけらかんとしている。

「あの私、予備のノートあるからあげるよ」

黒板を写し終えた日向がシンプルなパステルピンクのノートを渉に差し出した。

「おお！ ありがとうな日向！」

歯を見せて笑う渉に、日向はとても嬉しそうに微笑んだ。

「あんまし甘やかさないほうがいいよ日向」

「渉は調子乗るからねえ……」

その様子を見て瀬奈と颯人は辛辣な言葉を投げかける。

それは彼らにとつての日常だった。

いつも渉は何か問題をやらかして、瀬奈はそれを叱って、日向はそれをなだめて、颯人は困った顔で解決策を考える。

四人はずっと一緒だった。

「転校生を紹介します」

始業の鐘が鳴り、急に変更された六時間目の学活の授業で先生はいつもと違う挨拶で始めた。

「転校生？」

「クラスに新しい子が来るってこと？」

「どっから来たんだろー？」

ざわざわと教室内がざわめいて、皆各々、思いおもいに疑問を口に出している。

「はい、皆静かにしろー」

先生がそう言うと、しんと静まり返る子供たち。しかし、少しするとまたこそそと話し声はどこかしらから聞こえてくる。

「それじゃあ入ってもらって良いかな？」

少し大きめの声で先生は教室のドアに向かってそう言った。

ガラリと音を立てて開いたドアの先から、一人の少年が歩いてくる。

ストレートの下に向かって伸びた短髪、若干他の子よりも背格好が小さく身長も低い。も

うすぐ夏本番だというのに、長袖のシャツ長い丈のズボンを着ている彼は、教卓まで来るとこちら側に向き直った。

「初めまして、僕は三条青（ルビ・さんじょうあお）と言います」

白くて小さい顔から優しそうな瞳を向けて、ぺこりとお辞儀をする。小学生にしては礼儀正しい挨拶に、教室内は少しざわついた。

「青くんはまだ学校に慣れていないだろうから、皆、色々教えてあげてね」

「はい！」

先生が優しくそう言うとき子供たちは元氣よく返事をした。

「それじゃあ、青くんの席は……一番後ろの空いているところね」

その空いている席は、今現在机に突っ伏して寝ている渉の隣をひとつ開けて、ぽつんと一つだけある場所だった。

横を通る青の気配に、目を開けた渉は臆気な意識を保ったまま青の方を見た。

視線に気づいた青は、渉に微笑むと。

「宜しくね」

と小さな声で囁いた。

今日の学活の授業は『夏休みにしたいこと』というテーマらしく、渉たちは各々の班で間近に迫った夏休みをどう過ごしたいか話し合うことになった。

青は渉と同じ班に入り、離れていた机をお互いにくっつけてお互いに顔を見合せて話し始める。

「青はどこから来たの？」

「あ、あの青くんは好きなものとかある？」

しかし、新しく来たクラスの一人のことが気になり夏休みの話どころではない様子で、渉の班のメンバーである瀬奈と日向は、青へ質問をなげかけた。

「仙台から北の方、ここより田舎から来たよ。えっと、好きなものは……本かなあ」

「ふうん、ここより田舎ねえ。東京から来たんだったら面白かったのに」

「本！ わ、私も好きなの！」

授業のテーマから逸れた話で盛り上がる三人に、颯人はいつ話を戻そうか困った顔で考えている。

「仙台つてもここら辺は、ほぼ田んぼだらけだし田舎と大差ないべし」

話にのるわけでもなく、戻すわけでもなく眠たそうに欠伸をしながら渉がわざと訛りながらそう言った。

「はあ？ 私の家がある場所は住宅街だしあんたんとは違うんだけど？ 一緒にしないでくれない？」

反感を買ったのは瀬奈だ。彼女は親が仙台市内の会社を経営していて、いわゆるお金持ちの娘だった。

「はいはい、瀬奈様は俺たち庶民とは違うんですねー凄いですねー」
鼻をほじくりながら馬鹿にしたように、瀬奈を煽る渉。

「うざっ！」

瀬奈はそれにカチンときて、椅子から立ち上がると渉に殴りかかろうとする。

「まあまあ、落ち着こうよ二人とも」

颯人は瀬奈と渉の間に入って、二人をなだめた。

「だって」

言い訳をしようとしてハモった二人は、顔を見合わせてお互いを睨みつけた。

「……ふふっ」

そんな二人を見て、青は思わず笑った。

「何がおかしいんだよ、転校生」

渉は鋭い視線を瀬奈から青に移して、疑問を口にする。

「……ごめん、なんか可笑しくて」

口に手を当てて、笑いを我慢する青。

「ふふっ」

それを見た日向も何故か吹き出した。

「……日向までなんなの？」

瀬奈は意味が分からないという顔で、笑いをこらえている二人を見ている。

「ふっ、ふふっ」

ついいは颯人まで笑いだしてしまつて、三人が笑っている中、渉と瀬奈は困惑した顔でお互いを見合わせた。

「……………」

「……………」

「……ぶはっ」

「……ふっ」

お互い、間拔けな表情で顔を見合わせていたからか渉と瀬奈も吹き出す。

それをきっかけに、班全員が笑いを止められなくなってしまつて、結局、先生に怒られる羽目になった。

次の日、今日は一時間目から学活の授業がある日で、渉たちのクラスは昨日の続きで『夏休みにしたいこと』をテーマに話していた。

昨日の一件からすっかり仲良くなった五人は、今度は真剣に夏休みのことを話し合っている。

「ちよつと渉、何してんの？」

一人以外は。

「絵を描いてる」

渉は日向から昨日貰ったノートに鉛筆で、マントを羽織つて仮面を着けたヒーローのよ

うなものを描いていた。

「少しは授業に参加しなさいよ」

「後で発表もしなくちゃいけないらしいから、渉も参加してくれないと困るな」

瀬奈と颯人は至って真面目に話し合いをしていたから渉を真面目に注意するが、本人は絵を描く手を止めようとしなない。

「ちゃんと話は聞いているから大丈夫大丈夫」

目線をノートから離さずに頭で会話する渉に、二人は諦めたようにため息をついた。

「じゃあ、後で渉にも聞くからその時、何も聞いてないとか言わないでね」

「へーい」

渉以外の班員が話し合いをする中、黙々とヒーローを描き続ける渉。

決めポーズをして高らかに笑うそのヒーローを見て青は渉に聞いた。

「渉くんはヒーローが好きなの？」

「ん、好きだよ！ だって、かっけえじゃん！」

顔を突然上げて、渉は満面の笑みを見せた。

「かっこいい？」

「うん！ 誰かを助けるために何処にでも行くヒーローはかっこいいだろ！？」

「……確かに」

青はとても大事なことに気づいたような表情で一瞬固まると言葉を繋げた。

「確かに凄いかっこいい！」

「へへっ！ だろ？」

花が咲いたような笑顔で嬉しそうにそう言う青に対して、まるで自分がヒーローのように得意げな顔をする渉。

渉は気分が良くなって、ヒーローに細かい小物を付け足していく。

「戦うための剣を持って、赤いマフラーはその戦いで破れていて、この仮面で顔を隠しているんだ」

全ての小物に説明を付け足して、意気揚々と青に話すさまはとてもきらきらしていた。当然、青の表情もそれと同じできらめいている。

「ヒーローは仮面をしているから、助けられた人はヒーローの素顔を知らないんだね！」

「そうなんだよ！ だからヒーローが感謝されるのは戦ってる時だけなんだ！」

盛り上がる二人を日向と瀬奈と颯人の三人は、呆気に取られながら見ていた。それぐらい、二人は二人だけの世界に入っている。

「このヒーローが主役の本が読みたいなあ」

「そういえば青は本が好きなんだっけ？」

「うん！ 小説も漫画も読むよ！ あ、ねえ」

笑みを浮かべたまま青は言葉を紡いでいく。

「渉くん、漫画家になろうよ！」

秒針を刻む音がどんどん大きくなっていき渉は、ガラクタの布団の中で目を覚ました。すっかり薄暗くなってしまった部屋は、クーラーをつけていなかったせいで蒸し暑い。窓から差し込む夕日の奥からはヒグラシの声が聞こえたような気がした。

「……夢……？」

とても懐かしい昔の自分の夢を彼は見ていた。今とは全く違う自分の夢、でも確かに自身も体験したもの。

たかが夢だと一蹴されそうなものだったが、彼はそうしなかった。それはあることを思い出したから。

遠い夏の日、夢を抱いた時のことを、今の渉がこうなってしまった一つのきっかけを思い出したから。

「……青」

渉は今の今まで忘れていた彼の名前を口にした。

「なんで忘れていたんだ……？」

幼い頃のあの日、あの時、彼が渉にあんなことを言わなければ、渉は今の最悪な状態になってなかったのかもしれない。

いや、しかしそれよりもそんな大切なことを忘れていたのが不思議だった。

小学校の時、そんな印象的な出会い方をしていたら忘れるはずがない。

まるで今まであったのに見えていなかった霞が一気に見えるようになって、それが一瞬で晴れるように、渉は一つの記憶を思い出した。

2

新幹線で約二時間。ちょうどバイトの給料が入ったばかりで、余裕があったからか**渉（ルビ・わたる）**は比較的に速く地元の宮城に行ける方を選んだ。

すごい速さで移り変わる景色は、段々と緑が多くなっていき地方へ向かっていると実感する。

ただ渉はその景色を懐かしむ余裕もなく、ただただ焦燥感に駆られていた。

「あー……夏休み入ったから家に一旦帰るわ」

久しぶりに実家に連絡をした渉は、夏休みに入ったという体で地元に戻ることを伝えた。あれほど地元に戻りたがらなかった渉は、今その気持ちすら塗り替えられるほど衝撃的

なことを思い出したのである。

三条青という人物は、それほどまでに渉の人生の基盤になっていたらしかった。

「(同窓会は確か昨日だったから、あいつもきつといるはずだ)」

四人で一つのグループだった渉たちが青という転校生と仲良くなるのに不思議と時間がかからなかった。そんな彼を今の今まで忘れていたというのも大分、不思議なことであるが、それは渉自身も気づいていた。

だから、どうしようもなくなってまた勢いのまま行動してしまったのである。

「まもなく仙台、仙台……」

アナウンスが流れて、気がつけば窓の外はビルが複数建ち並び自然と融合した東北の中心——仙台市に着いていた。

多くの乗客が大きな荷物を持って新幹線を慌ただしく出ていく、渉もそれに倣い、上の荷物棚に置いていたキャリーケースを引っ張り出した。

ガラガラと音を立ててキャリーケースを引きずり、リュックを背負い直して新幹線から一歩踏み出す。

忙しい人々の話し声、繰り返されるアナウンス、新幹線が到着する音。全てが渉にとって、あの日以来に久しぶりに聞いた音だった。

「……東京に初めて行った時もこんな感じだったな」

新しい場所に心躍らせて、夢を絶対叶えるという思いで乗り込んだ新幹線。今や、それは悲しい思い出の一部となりつつあった。

「まず家に帰るか……」

渉は思い出に浸ることもできず、久しぶりに帰った地元に着えながら、緊張した足取りで歩き出した。

渉の実家は仙台市といっても割と緑の多い地域にある。電車は一時間に二本程度で、最早田舎といっても過言ではない。

駅から家までは田んぼだけの道を三十分程歩く必要があった。

「……ちゃんと誤魔化せるかな……」

渉はどうかして学校を辞めたことをバレないようにしようと思えこれ考え込んだ。

「うん……うん、課題やつてるフリしとけば大丈夫かな」

考えた結果そういった結論に至った。

もう目の前には渉が十何年間、住んでいた木造建築の平屋が木々に囲まれて建っていて、渉は緊張でゴクリと生唾を飲んだ。

そろそろと塀の内側、敷地内へ入っていき引き戸の玄関前まで着いた。

冷や汗をかいた手で玄関扉に手を伸ばした瞬間——。

「おかえり!!!」

ガラッと音を立てて扉が開き、誰かが飛び出してくる。

茶髪の髪をポニーテールにして、薄い桃色のエプロンを着た女性は、渉に思いっきり抱きつくとそのまま力いっぱい抱きしめた。

「っ！ かあさんっ……！ いたい、痛い痛い！！！」

渉の母は、息子が手をパシパシ叩いてギブアップを示そうとも締めることをやめない。「だって久しぶりに我が子に会えたんだもの！ 嬉しすぎてもう離さないわぁ！」

涙を浮かべて嬉しそうに微笑む母の力は、渉の父ですらたじろぐ程のもので、渉はもう意識をどこかに落としていきそうな勢いだっただ。

「かあっ……さん……ぐはっ……」

渉は本当にそのまま意識を失った。

「……る、……たる……」

幼い少年の声が聞こえてくる。

「……渉！」

「はっ！」

青（ルビ・あお）に呼びかけられて、渉は目を覚ました。どうやら授業中にいつの間にか寝てしまっていたらしく、青はそんな渉を見兼ねて起こしてくれたらしい。

「良かった……やっとな起きてくれた」

「んー、青、今なんの授業だっけ……」

まだ眠たそうに瞼をこすりながら渉は聞いた。

「今は算数の授業だよ……番号順で宿題の答えを聞かれてるんだけど、もう少しで渉が当てられそうだから起こしたんだ」

その言葉で気づくと丁度、渉より前の出席番号の子が算数の式を答えてる最中だった。

今の今まで寝ていて、教科書すら開いていなかった渉は、一気に全身の血の気が引いて青ざめた。以前の算数の授業も同じことがあって、結局先生に怒られたのだ。

「は、颯人（ルビ・はやと）！ 答えを教えてください！」

咄嗟に隣の席にいる颯人に助けを求めたが、颯人は首を振ってノートを袖で隠した。

「うっ、あ、青！ 答えを……」

そう言いかけた瞬間、渉は背後に何かの気配を感じた。思わずその場で固まる渉。

教室中の皆が一番後ろの席にいる渉を見ている。恐る恐る振り返ってみると、そこには――

「渉、次忘れた時は廊下に立たすって言ったよな？」

にっこりと仏のような微笑みを顔面に貼り付けている先生が背後にはいた。

「ヒュッ……」

思わず息が止まり放心する渉。

結局、そのまま算数の授業が終わるまで廊下に立たされる羽目になった。

鐘の合図とともに小休憩へとなり、子供たちは教室から飛び出していく。それと入れ違ひになるように渉は教室に入っていた。

「宿題やってこなかったの何回目よ？」

「むしろやってきた時の方が稀じゃないかなあ」

相変わらず**瀬奈（ルビ・せな）**と颯人は呆れ顔で渉を迎え入れる。**日向（ルビ・ひなた）**

と青はフオーロしようにもどうにも出来ないという表情をしていた。

「いやあ、むしろやってこないのが普通だから、先生もそこに気づいて欲しいよな……つて！」

頭を搔きながら笑い混じりにそんな事を言う渉の頭を通りがかりに小突いた。

「あんにゃろ……だから結婚出来ないんだ」

渉の小言が耳に届いたのか、先生はわざわざ戻ってきてもう一回、今度は少し強めに渉の頭を小突いた。

「いつてえ！」

「うっさいわ！ 今度はちゃんと宿題やって来なさいよ！」

そう言いながら力強い足取りで教室を出ていく先生は、渉たちが四年生の頃から担任で、今は六年生を受け持っている。

歳は二十代後半で未だ結婚相手はおろか、恋人さえいないと噂されているが真意は定かではない。

「くっそお！ めちゃくちゃ痛かった！」

「自業自得」

「今度はちゃんとやって来ようね……」

「よ、良ければ手伝うよ……？」

休み時間に入った教室はざわめきが多くなり、皆それぞれ別々の話題で盛り上がっている。

「そういえば夏休みに行きたいところ決まった？」

瀬奈が渉に聞いてくる。しかし、当の渉はなんの事だか分からないというふうには首を振った。

「夏休みにやりたいことをテーマに話してただろ？ それで僕達の班は夏休みに行きたいところを話し合うことにしたの覚えてない？」

「確かにそんなことをした……気がする」

全く覚えていなかったが、そのことを伝えるとややこしくなりそうなので少し濁した言い方をする渉。

颯人は怪しいなと気づいたけれども、そのまま話を続けた。

「そこで班員それぞれが行きたいところを考えてきて欲しかったんだけど、みんな考えた？」

メンバーをまとめることに長けてる颯人は班長に相応しい。今もこうやって、渉に投げかけた後にしつかり他の班員も考えてきたか聞いている。

「考えてきたけど……なんかあんまりぱっとしないのよね」

瀬奈はまだ本当に行きたい場所が決まっていけない様子で答えた。

「私は綺麗な景色が見えるところに行きたい……かな」

「それなら僕の行きたいところにも合うかも！」

青は日向の発言に対して、嬉しそうにそう言った。

「青の行きたいところってどこだ？」

自分の行きたいところを考えていた渉は、参考がてら青に訊ねた。

「ふふ、それはね」

ジリリリンとけたたましい目覚まし時計の音が耳元で響いて、渉は飛び起きた。夏場だというのに冷房を着けず窓を若干しか開けていなかったため、汗をびっしょりとかいていた。

「はあ………今何時だ？」

反射で押したスイッチの下を見てみると時刻は午後十二時を過ぎていた。

昨日、久しぶりに実家に帰ってきて早々に母親に意識を落とされ、夕方頃に帰ってきた父親にもあれやこれやと言われて騒がしい一日を過ごした渉は、自室で倒れるように眠りについたのであった。

「……また昔の夢か」

この前見た夢が発端で実家まで帰ってきているのだから、また似たようなものを見ても心理的におかしくはない。

「にしても精神的にくるよなあ……」

日向と瀬奈の顔は出来ればもう見たくなかったし、顔を見せたくなかった。たとえそれが夢であろうとも、あの日のことを思い出すきっかけには十分だ。

「渉ー！ ご飯用意したわよー」

玄関から一番遠い所にある渉の部屋まで、リビングの方から母の声があった。リビングは玄関に近い所にあるため、会話をするには遠すぎる。

「分かった今行くー！」

渉は寝起きの声で精一杯大きく叫ぶと布団から出た。

上京してからは慣れない一人暮らしでご飯を用意出来ない日も当然あった。そんな渉にとって、何もせずともご飯が出てくるという暮らしはとて有難いものだった。

「今日のお昼ご飯は簡単だけど、目玉焼き乗せ焼きそばよー！」

そう言って出せたのは半熟の大きな目玉焼きが乗った焼きそば。食欲をそそる刺激的なソースの匂いに寝起きにも関わらず渉の胃袋はまぬけに音をたてた。

「いただきますっ……！」

手を合わせてそう言い終えると、皿を持って焼きそばを一口にかっこんでいく。その様子を心底嬉しそうに涉の母は見つめていた。

「あ、そういえば今日はどこかに出かけるんでしょ？」

思い出したかのように訊ねる母に涉は焼きそばを口に詰め込みながら頷いた。

「良ければ車で送ってく？」

交通の便があまり良くない涉の町は車がとても大事で、車なしでは町を一周するのに一日かかるぐらいだ。

しかし涉は焼きそばをよく噛みながら首を横に振った。

「大丈夫。久しぶりに帰ってきたから歩いて見て回りながら行きたいんだ」

コップ一杯の水を一気に飲み干すと涉はそう言って食器を下げに行った。

そして自室に戻ると、寝る前に必要な物を詰め込んだリュックを背負い玄関先へと向かう。

「行ってらっしゃい！ 気をつけてねえ」

「ありがとう。あと、焼きそば美味しかったごちそうさま！」

靴を履き揃えて、スマホと財布がリュックに入っているか確認しながら涉は玄関を出た。玄関の扉を出て、わざわざ見送ってくれる母に手を振り返してみると改めて帰ってきたという気持ちの涉の鼻先にツンと来て、あやうく泣きそうになってしまう。

「(いつか近いうちに話せたらいいな……)」

自身の夢を応援して送り出してくれた親に、その夢を諦めてしまったことを告げなければいけないのは分かっている。涉はまだそこまで心を強く出来なかった。

空は雲ひとつない晴天で、太陽がじりじりと照り付き、身を焦がすような暑さだ。セミが忙しく生きていることを主張して、時折吹く風は珍しく涼しい。

三十分ほど歩いて、涉はふと自分の足取りが無意識にどこに向いていたか気づかされた。目の前には所々ひび割れたコンクリートで造られた古い建物。最近の夢によく出てくる

場所。

「明日賀屋(ルビ・あすがや) 小学校……」

校門に書いてある名前を読み上げて、涉は再び建物を仰ぎ見た。

あれから七年ほど経った今でもその面影はしっかりとあった。

校庭でサッカーをしたり鉄棒したりして遊んだ休み時間、給食当番で行ったり来たりした学校裏口、古びた水道の蛇口はあっちこちを向いていて、教室は机と椅子を引きずった跡が沢山あった。

暑い日も寒い日も六年間通い続けた学校。沢山の思い出がそこにはぎっしりと詰まっている。

「同窓会、行けばよかったかな……」

思わずそんな言葉を零してしまった自分自身に涉は驚いた。

しかし、もし渉が同窓会に行っていたならそんな懐かしい思い出話に花を咲かせ、楽しい一時を昔のクラスメイトたちと過ごせただろう。そして、瀬奈や日向ともあんなことにならずに済んだはずだ。

「……本当、何やってんだろう俺……」

嘘まで吐いて守りたかったものはプライドだった。絶対に叶えると信じてきた夢自身だった。

でもそのせいで、渉は渉自身が嫌いになり始めている。

「こんなに大事なもんなのに……捨てちゃうなんてな……」

はは……と笑ってみても彼の表情は笑顔からは到底かけ離れた悲しいものだった。まさに後悔を顔に描いたようなその表情は次第に歪んで、ぽつぽつと小さな雨を降らす。

「やり直してえな……」

ぎゅっと握りしめた拳を額に当てて、涙を我慢しようにもその勢いは留まることを知らない。

「何やってんのこんなところで」

ふと聞いたことのある声が後ろから聞こえた。思わず振り向いてしまった渉は、今の自分の表情がどんな風になっているか察して、咄嗟に顔を隠す。

しかしその一瞬、垣間見えた表情を声の主は見逃さなかった。

「なに泣いてたの？」

「……泣いてなんかない」

「泣いてるじゃん」

「泣いてないって」

泣いてないと言いつつも顔をあげようとしないう渉に、黒髪の女の子は呆れた顔でため息を吐いた。

「お前、なんでこんな所にいるんだよ瀬奈」

「あんたこそ同窓会には来なかったくせに、のこのこ帰ってきたの？」

毎回タイミングの悪い出会い方で、お互いに最悪な印象しか抱いていない二人の間にぎこちない雰囲気 flowed.

「それに私がここにいるのは不自然じゃないわ」

瀬奈は涉から返事をする気がない気配を感じると話し始めた。

「私、同窓会の幹事だから明日小（ルビ・あすしよう）に用があったの」

瀬奈は先日行われた明日賀屋小学校同窓会にて、幹事を務めており準備や運営などの仕事をこなしていたらしかった。今日は、その後の仕事で小学校まで立ち寄ったらしい。

「……同窓会は終わったんだろ？ やる事なんかあるのか？」

やっとな涙が収まってきた渉は袖で目元を拭うと顔を上げた。

まだ目が充血していて、泣いていないと言う彼の意見はもうこれで通じなくなったが瀬奈はそれには言及せず答える。

「終わった後も忙しいのよ。久しぶりに会った友達から校舎の撮影してきて欲しいとか頼まれたりするしね」

「それって雑用……」

「他にも色々あるの！ 言えないだけで！」

そう言うのと頬を膨らませて瀬奈は怒ったような顔を見せた。

案外、子供のような反応に渉は素直に驚いた。普段の様子からは全く想像出来ない姿で、別人と言われても納得してしまうくらいだったからだ。

「そっか、色々大変なんだな……お疲れ様です」

あまりの忙しさに性格まで変わってしまったのかと思い、劳いの言葉をかける渉に、瀬奈は先程の表情から一転変わって真顔になった。

「なんかあんたに言われるとキモイ」

「はあ！？ 劳ってやってるのになんだそれ！？」

「別に頼んでないけど！？ 意味わかんない死ね」

唐突な暴言にシヨックを通り越して怒りで頭に血が登った渉はすぐさま反論しようとした。

「ナチュラル暴言やめろよな！？ お前だって——」

「お前たち学校前で何やってんだ！？」

瀬奈に何かを言う前に、その言葉は校門から出てきた教職員と思われる中年男性に遮られる。

彼は黒縁の丸いメガネをくいつと上げながら渉達に近付いてきた。

「あ、あ……えっと、怪しいもんで……」

「馬鹿！ そう言ったら余計怪しまれるでしょう！？ えっと、私ここの卒業生でして……」

瀬奈は慌てて何とか説明しようとする。しかし、瀬奈が言葉を紡ぐ前に男性は何かを納得したような顔をした。

「——ああ！ 宮野ビルディング株式会社のお嬢さんか！」

そう言いながらほんと手を叩く男性。

「(通報沙汰とかにならなくて良かったあ……)」

渉は安心したようにほっと息を吐くと、瀬奈の方を見た。

「良かったよ、お前が有名人で——」

「……………」

渉は素直に瀬奈にお礼を言おうとしたが、その時の瀬奈の表情は今までで見たことないくらい悲しそうなもので、思わず言葉が途切れてしまう。

「今日はどういったご要件でいらっしゃったのですか？」

ニコニコと先程とは打って変わった態度で、そう訊ねる男性に瀬奈は要件を伝えた。

校舎内の写真を撮らせて欲しいという願いは、あっさりと聞き入れられて、流れで同行出

来ることになった渉は、先程の表情について聞こうか聞かまいか思案する。

夏休みに入ったことで生徒は一人もいなく閑静な学校内には渉たちの靴音だけが響いていた。

想像よりも低く感じる天井、やけに短く感じる廊下、思い出の中で美化されていた教室。ただそれらを見る度に、思い出してくるのはやはり昔の記憶だ。

「――なあ瀬奈」

「なに？」

六年生の教室内を自前の一眼レフで撮影する瀬奈に、渉は開け放した窓から顔を出して遠くで鳴いている蝉の声を聴きながら彼女の名前を呼んだ。

「確かお前んとこの会社ってすっげえ大きいんだよな」

パシャリ。カメラのシャッター音が響いて、沈黙が出来る。

「……それがどうしたの？」

その声はとて低くて、冷たくて、思わず渉は振り返った。触れてはいけないものに触れてしまった気がして、渉の首筋に冷や汗が流れる。

「い、いや……何となくさ。親が社長とかって凄い自慢出来るじゃん？」

早口でそう話す渉は、自分が何を言ってるのか自分で分からなくなっていた。

言った後で、瀬奈なら「何言ってるの？」と馬鹿にしてきそうな気がして、言わなきゃ良かったと後悔する。

しかし、彼女の反応は予想とはだいぶ違うものだった。

瀬奈は若干、顔を伏せて押し黙った。

表情は先程、校門で見たものと同じ悲しげなものだ。

「……せ、瀬奈……？」

戸惑った渉は思わず声をかけて、それによる反応を伺った。

「……………」

しかしそれでも瀬奈は同じ表情のまま、黙りこくっている。

「……………」

必然的に渉も無言になってしまい、静かな教室内には何とも言えない雰囲気場を制した。

「……わよ」

「え？」

唐突に口を開いた瀬奈の言葉がよく聞き取れず、聞き返す渉に、瀬奈は顔を上げて鋭く言い放った。

「凄いと思ったことなんか一度もないわよ。むしろ大っ嫌い」

彼女のその言葉は、先程見せた表情や反応よりも渉にとって予想外なものだった。

渉の記憶の中にある瀬奈は、自身が恵まれた環境を理解していて、それを話題出すことに抵抗がないくらいの子だ。

子供の頃はよく家族の話をしていたし、特段、親に対する悪口を言っていた印象もない。だから、渉は素直に疑問を口にした。

「お前がそんなこと言うなんて、何かあったのか……？」

ただその疑問は瀬奈にとっては起爆寸前の爆弾を投げ渡された時のように、非道で衝撃的なものだったらしい。

「昔っから言ってたじゃない……」

そうボソリと呟いて。

「あなたには分からないでしょうね！」

怒鳴るようにそう言い放った。

当然、急に怒り出した彼女に対して渉は顔をしかめる。何か言い返そうとした瞬間、渉は瀬奈の姿に目を奪われて言葉を失った。

「……あなたには……分からないわよ」

ぽつぽつと瀬奈の白く透き通った頬の上を通って、透明色の雫がこぼれ落ちていく。

それが泣いているという事だと理解するのに数秒かかった程、彼女のそんな顔は珍しかった。

「……な、な、なんで泣いて……」

「泣いてなんかないわ！」

情けなく慌てふためく渉に、なおも瀬奈は強い口調で返した。

「いや、泣いてるじゃん……」

「泣いてないって！ しつこい！」

今度は立場が逆になって、何処かデジャブのあるやり取りが行われる。お互い、それに気づかずに言い合いを続け、最終的に既視感を感じて二人とも黙った。

「……はあ、だっさ」

あの時の渉のように未だ充血している目を隠そうとせず瀬奈は面を上げてため息を吐いた。

「……それは俺に対して？」

恐る恐る忍び寄るが如く慎重に聞いた渉を一瞥して、瀬奈は「どっちも」とだけ答えた。先程から随分長いこと鳴っていた蝉の声が一瞬、止まって瀬奈は口を開いた。

「私さ、あなたに正直、もう一生会いたくなかった」

開け放した窓から夏風が舞い込んできて、瀬奈の長い髪は風に揺れる。

「でも、やめた。まだ言い足りないこと沢山あるしね」

「それ、言うだけ言って縁切られるパターン……」

窓の外、校庭に生えた木々から聞こえる蝉の声が遠く遠くなっていく。

「あなた、私の事なんだと思ってるのよ」

「高飛車で自分勝手ですぐキレル怖い奴」

「はあ！？ あんただだって自分勝手に、逃げてばかりで、最低な奴じゃん！」

反撃でまあまあの正論をぶつける瀬奈に、否定したくても出来ない渉は口をつぐんで俯いた。

先日の件について反省しているような様子を見せた渉に、瀬奈は少しだけ柔らかい口調で言葉を付け足した。

「……まあ、あんたのした事は許せないし、のこのこ謝りもせずに帰ってきたのはムカつくけど……」

「……………」

「私は、夢を持ってキラキラしていて、うざいくらい希望を語ってるあんたの事、嫌いじゃなかったよ」

気づけば周りの音が聞こえなくなっているほど、瀬奈から言われたその言葉に意識を奪われていた渉は、口を半分開けて目を何回も瞬く。

「何その反応……今は好きじゃないって遠回しに言ってるんですけど？」

「いやでも、だって、昔も今もいつでも、そんなこと言わなかったじゃん」

渉にそんな返しをされると思っていなかったのか瀬奈は一瞬驚き、口を開けて何か言いたそうに呻いている。

「……そうだっけ？」

「そうだよ!？」

いつの間にか取り戻した夏のざわめきに包まれながら、静かな教室内で二人は久しぶりにあの頃のようなやり取りをした。

校庭の真上の空は、今朝と変わらなず雲一つない晴天で気温はどんどん上がっていく。差し込む太陽の光ですら、ずっと当たっていたら熱中症になってしまいそうなくらい暑かった。

時折吹く風は涼しくとはならないけれど、夏の匂いが沢山して、この季節にしか味わえない素敵な気分になれる。

ミンミン、ジワジワ、そんな蝉の声が学校の何処へ行っても聞こえるくらいには、忙しくその声を必死に上げて鳴いていた。

渉たちは、目的だった瀬奈の写真撮影を済まして、男性の教職員に挨拶をした後、学校を出ることにした。

「親御さんに宜しく頼みますねえ」

そんな言葉を投げかけられた瀬奈の表情は、教室で見せた時のような悲しいものではない切なく、どこから見ても純粹な笑顔だった。

ただそれを渉だけは知っていた。その笑顔が全ての涙の裏返しであることを。

一年生から六年生までの下駄箱が壮観に並ぶ昇降口で、丁寧に並べたシューズを手に取りスリッパから履き替える渉。

彼はふと、さっきまで隣にいた彼女の気配がないことに気づいて後ろを向いた。

「何してんだよ？」

そこにはやはり、スマホを凝視して立ち止まっている瀬奈がいて、渉の声がまるで聞こえ

ていない様子だ。

何事かと手に持ったシューズを再度、玄関に置いて瀬奈の元へ向かうと、彼女はようやく画面から顔を離して、渉を見上げた。

「何かあったのか？」

「ちよつと日向から連絡が来て」

日向、その名前を言われた瞬間、渉はもう一度あの時の事を正確に思い出して、まるで追体験したように感じた。泣いている日向の表情が何度も何度も繰り返されて、最後に残る瀬奈の「最低」の一言。

少しは緩和されたと思っていた認識が、恐怖としてまた襲ってくる感覚を拭えずに渉はその場で固まった。

「？ 誰？ 青って……」

しかし直後、瀬奈の口から出たその名前は、渉を過去の記憶のループから解放するには十分なものだった。

「青!？」

明らかな反応を示す渉に、瀬奈はスマホの画面と渉の顔を見合わせて首を傾げる。

「いや誰？ 青って……?」

「え？ 覚えてないのか……?」

かく言う渉も最近、思い出したのだが瀬奈は全く誰か分からないという感じで、ひたすら怪訝そうな顔を浮かべるばかりだ。

「覚えていない……っていうか、そもそも知り合ったことないと思うけど」

「いやでも、お前、小学校の時——」

そう言いかけて渉は、何故自分と日向だけが、青のことを覚えている又は思い出しているのか疑問に思った。

「……いやでも、そんな……」

ブツブツと何かを唱えて考え出した渉に、自分だけ取り残された気がしたのか、瀬奈は日向とのトーク履歴が映っている画面を渉に見せて。

「説明して!」

と怒ったように言った。

相も変わらず第三者に誰かとのトーク履歴を見せることに躊躇いが無い瀬奈に、渉は後ずさりかけた。前の一件で見た衝撃的な内容がフラッシュバックして、見ることを迷いかけたけども、日向から送られてきた新着のメッセージに書いてあったことは、それよりも衝撃的なものだった。

『瀬奈ちゃん、青くんって覚えてるかな？ なんか夢を見たんだけど、私、それまであの子のこと忘れてて……』

『凄いい心に引っかかる感じがするの。私だけ忘れてたのかな?』

そんな内容のメッセージを二件送り、日向からの連絡は終わった。

しかし、それは難問を解いた時のように満足と納得のいくようなもので、渉にとっては、青という少年が幻ではないと決定付けるのに十分なものであった。

「俺と同じだ……」

「は？ 何が？ ってか本当に誰？」

訳が分からなすぎて今にでも殴りかかってきそうならい、目の前の渉を睨みつけている瀬奈。

渉は間違ってもそんな痛い思いをしないように、以前見た夢の話、青という少年のことについて話した。

「どうやら瀬奈は、本当に何も覚えていないようでどれだけ詳細に夢の中での出来事、青と過ごした小学校での日々を話しても、ピンと来ていないようだ。」

「でも、それってただの夢でしょ？ 本当にその子がいたってのは記録に残ってるのかも分からないじゃない」

「そう……なんだけどさ。なんかただの夢って感じがしないんだよな」

恐らく日向も同じ感覚なのだろう。

「ふうん、じゃあ丁度学校にいるし、その子のこと調べるわ」

瀬奈は片手間にスマホを素早くタップすると、踵を返して歩き出した。渉も慌ててそれに倣い、足早に歩く。

先程お礼を言って帰ることを伝えた手前、まだ学校内でやりたいことがある事を教職員に言うのは気が引けたが、意外にも彼はあっさり承諾してくれた。

それは恐らく、宮野の財力とも少なからず関係していそうだが、渉はそれには一切触れず肅々と事の成り行きを見届けた。

「資料室の鍵がかかっているロッカーに、今までの卒業生が載っている本があるって言うってたな」

「そうね、この卒業生とは言えそんな大切なものを見せていいのかしら」

渡された資料室の鍵をガチャガチャと鍵穴に差し込み、ギィと音を立てて開いた扉。見た目の割に立て付けが悪く、あまり開ける事がないのか、室内からは埃臭いにおいが漂っている。

「げほっ……さあ、探すわよ」

「こんなとこ一回も入ったことないかも……」

どこもかしこも埃だらけで長年掃除をされていない印象を受けるその部屋の奥、一際目立つ錠が掛けられた鼠色のロッカーが鎮座している。

それが例の資料が入っているロッカーだろう。

瀬奈は渡されたもう一つの小さな鍵で、戸にかかっている金色のこれまた小さな錠を開けるとカチャリと小気味よい音を立てて、すんなりと開いた。

中には分厚い本がいくつも並んでおり、埃臭いにおいとカビ臭いにおいが混じって鼻先までツンとした臭いを届かせる。

「えー……と、第五十一期生……あった！」

「よく覚えてるな……何期生かなんて」

「同窓会の幹事なんだから当たり前よ」

両手でやっさと持てるぐらいの重さの本をばらばらとめくりながら、瀬奈は答えた。

ページが段々、生徒の項目になっていき見覚えのある人達の懐かしい顔が一枚毎に印刷されていた。

「なんだっけ……その青って子の苗字」

「確か三条……」

あいうえお順で尚且つ色別で記されているため、苗字から探せばすぐに見つかるはずだ。瀬奈はページを飛ばして、右上にさ行が書かれた所まで進めた。薄桃色をしたページだ。

異様な緊張感が場を包む中いよいよ、さ行の終わりを示すかのように薄桃色のページは残り一枚となった。

瀬奈が次のページをめくろうとした瞬間、後ろの方で聞き覚えのある声が出た。

「なんで……ここにいるの……？」

そこには目を見開いて肩を震わせながら、青ざめている日向の姿が。

そして同じ表情で彼女を見つめる渉。しかし、渉はその瞬間気づいた。

日向がここにいるということは紛れもなく誰かからの指示によって、この学校に来たということだ。そして、それを成し得ることが出来るのは、瀬奈しかない。

もしやまた嵌められてしまったのか。そんな考えが脳裏を掠めて、渉は瀬奈を凄惨な形相で見た。

「あー、まあ私が呼んだのは間違いないんだけど。それはあくまで情報共有ってことで、今回は何も企んでないよ」

渉の反応を見て察したのか、あっけらかんとした態度で瀬奈は説明する。

「情報共有……？」

今にも消え入りそうな声で日向は疑問を浮かべた。

「そ。私には分からないけど、あんた達二人は共通の夢を見たらしいから、二人で情報を共有した方が早いじゃん？」

共通の夢。日向はその言葉を言われた瞬間、ハッとした表情で渉を見た。渉はそれに対し、頷く。

「色々言いたいこと沢山あると思うけれど、まずは話してからでも遅くないじゃん？」

元はと言えば瀬奈があんな事をしなければ、こんな事にはならなかったのにと思いつつも、自分が逃げなければそもそもバラされることも無かったと認識している渉は、瀬奈の提案に承諾した。

日向は黙りこくってしまっただけで、反論することも肯定することも無かった。昔から明るい性格で周囲をいつも照らしていた彼女からは、想像出来ないほど暗い表情を見せている。

「……」

六年生の教室で話し合おうと提案した瀬奈は、資料室の鍵を返す為に先へ行ってしまった。

長い廊下には軽率に話してはいけないような雰囲気の流れで、二人は無言のまま教室へ向かう。

「その……」

六年生の教室がある三階へ続く階段を上る途中の踊り場で、渉は意を決して口を開いた。

「その、この前のこと……本当に悪かったと思ってる」

後ろを歩く日向に背を向けながらそこまで話して、渉は日向の方を向き直った。

「ごめんなさい」

深々と頭を下げ、渉は返答を待った。階段を上ってきたせいか、暑くなった身体からは汗が出て、額からも自然とそれはこぼれ落ちていく。

「……………」

「……………」

それはとても長い時間だった。

しかしそれでも渉は日向から一言も何も聞けないのであれば、もう頭を下げ続けたまま生きるぐらいの決意を秘めていた。

「……頭を上げてよ……」

日向の震えた声が反響して聞こえた。

素直に頭を上げた渉は、目の前の日向が今にも泣きそうな顔で立っていることに戸惑いを覚えた。

「あ、日向……」

「……………とつても悲しかった」

渉に見られたくないのか顔を伏せて、日向はそう呟く。それを皮切りに、日向の口からは息付く間もなく次々と言葉が飛び出してきた。

「沢山仕事をして、そのお金で専門学校に入って、少しでも追いつけるように、お互いの夢を叶えられるようになって頑張ってたのに、勝手に諦めて、それを誰にも言わないで、隠して」

「……………」

「本当に酷い……酷いよ……」

伏せた顔からはとめどなく涙が溢れて落ちてゆく。

「……でも、でもね、私、気づいちゃったんだ」

「……………え？」

「なんか、それって涉くんの夢を強制してたんじゃないかって……気づかないうちに、涉くんに辛い思いをさせてたんじゃないかって……気づいたんだ」

涙を手のひらで拭い、渉の方を見る日向の表情は、渉と同じような後悔の感情が浮かんで見えた。

「謝りたいのは……こつちの方だよ……ごめんさい」

先程の渉と同じく深々頭を下げる日向。その姿からは渉と同等の覚悟があるように窺えた。

「いや、顔上げてくれ日向…… 何はともあれ勝手に逃げた俺が悪いんだ！」

「涉くんが私が悪いことを認めるまで上げない」

「ええ！？」

日向はずつとほぼ九十度の礼をした状態で、一向に頭を上げようとしない。

「……ええつと……じゃあ、俺も日向も悪いってことじゃ……ダメかな……」

頭を掻きながらそう言う渉に、日向は納得したのかやつと顔を上げた。

「涉くんは変わらないよね……」

「え？」

「ううん、なんでもない」

はにかみながら日向はそう言った。

何だか急に懐かしさが込み上げてきて、渉は笑い返す。

「あんたら仲直りしたんなら早く行ってくれないかな」

いつの間にか階段下にいた瀬奈は、両手を腰にあてて退屈そうに見ている。

「いつの間に！？」

「いたんなら言つてよ！ 瀬奈ちゃん！」

瀬奈は何だか二人の反応が、小学生の頃のままのような気がして、一瞬、小学生の時の彼らが見えたような気がして微笑んだ。

六年生の教室で、早速先程開きかけた資料のページを確認した三人だったが、三条青という人物の情報は一切載ってはいなかった。

次いで、日向が家から持ってきた小学校の時の卒業アルバムの内容を確認したが、そこにも当然のごとく青の顔写真もプロフィールも記されてはいなかった。

「青なんて子、いなかったんじゃないの？」

「でも、本当にいたと思うんだよ。とつてもリアルな夢だったもん」

「……そーいや日向は、どんな内容の夢を見たんだ？」

もう日がかかなり傾いて西陽が差す教室内。まるで放課後に、クラスメイトと別れるのが寂しくてギリギリまで談笑していたあの頃のように、三人は一つの机を囲って話していた。

「うんとね、あんまり長くはなかったんだけど」

日向は、自身が見た夢のことを話した。それは言わずもがな、渉が見たような過去の記憶の夢だ。

彼女の夢は、もう既に青が四人と随分仲良くなっていった時の頃だったらしい。

夏休みに行きたいところをテーマとして話し合っていた渉達の班は、青が提案した場所について研究することになった。

「その青って子は何処に行きたいって言ったの？」

「青くんのおばあちゃんが暮らしてる町だって言った」

「何だってそんなとこに……?？」

青は授業内で話し合ったあの日、自身の祖母が住んでいる地域に夏休みに行きたいと言っていた。初めは、颯人や瀬奈もなんでそんな場所にと首を傾げたが、理由を聞いてみて満場一致で行くことになったらしい。

「理由って?」

「青くんのおばあちゃんが暮らしてる町には毎年、夏になるとお祭りが開かれるらしいんだけど、その年は少し特別で、十年に一度願いが叶うお祭りなんだって」

昔からのしきたりが多くある田舎特有の不思議なお祭り、十年周期でその特別なお祭りは開かれる。

なんでもその日だけに配られる紙に願い事を書いて、それを神社の裏にある大きな神木の根元に埋めると誰かの願いが叶うらしいのだ。

それは小学生にとっては、素晴らしいお祭りに見えただろう。毎年、願いが叶うと言われているお祭りならまだしも十年という長いスパンがある。

丁度良い現実味のある話で、満場一致するのも頷けないことも無かった。

「なるほど……願い事ね……」

「その後はどうなったんだ?」

「そこで目が覚めちゃって……結局行けたのか行けなかったのか分からない」

日向は申し訳なさそうに首を振った。

「神社の神木に埋めた記憶ねえ……ダメだ全然覚えてないわ」

瀬奈は椅子の背もたれ部分に肩を預けて、残念そうに呟く。

「俺も実は出会った最初の頃しか覚えてなくて、あの後卒業したのかすらも覚えてないんだ……ああ」

渉は何か思いついたような顔をして、瀬奈と日向を交互に見た。

「? 何?」

「同窓会にそれっぽい奴とかはいなかったのか?」

「名簿を全部丸暗記してるけど、そんな名前の人いなかったわ」

「そうか……じゃあ」

渉はもう一人、夢を見てそうな人物の名前を上げた。

「あとは颯人が何か知っていれば良いんだけどな……」

「颯人くんかあ、頭が良いし忘れたりなんかしなさそうだよね」

「……颯人か……」

日向の肯定的な反応に反して、瀬奈はその表情を少し陰らせた。

「颯人となんかあったのか?」

渉はその反応に気づき、咄嗟に聞く。

「んー、なんかっつていうかさ……あんたと同じで同窓会に来てないのよ。しかも何の連絡もなし」

「あの颯人が？」

颯人は渉達の中で特に成績優秀で先生にも一目置かれる優等生的な存在だ。そんな彼が何の連絡もせずに何か行事ごとを欠席するとは考えられなかった。

「うん……。私からも何回か送ったんだけど、既読すらつかなくて……」

「仕事が忙しいのは分かるけど、連絡ぐらいいしてほしいわよね……」

「仕事？ てっきり名門大学とかに行ったかと思ってた」

渉と颯人が最後に話したのは小学校卒業後、中学校に入りたての頃、地元祭りでの会った時だ。

別々の中学校と高校に進学したため、颯人の進路先は分かっていたいなかった。唯一、それを知っているのは中学も高校も一緒に進路を選んだ瀬奈だけだ。

「高校の先生達も進学を推薦していたけど、就職を選んだみたい。理由は知らないけど」

「意外だなあ……あの颯人が」

颯人ぐらいの学力なら国内の有名な大学に行ってもなんら不思議では無かった。それをしないで就職を選んだのは、余程のつびきならない事情があったのだろうか。

「でも東京の有名な会社なんだよね？ 流石だなあ……」

「東京！？」

「そ。あんたと同じで上京してんのよ」

日向は瀬奈から聞いたのか颯人が上京して働いていることを知っているらしかった。

「じゃあもしかしたら街ですれ違ったりとかもしてたかもしれないなあ」

とは言っても、約七年の歳月が経ち、その間一度も会っていなかった渉と颯人が、すれ違った程度でお互いを認識出来るとも限らない。

「……実はね、二人が同窓会に来ないってことを知って、少しでも四人で話せたらと思って東京に行ったんだけど……」

「颯人からは一切、連絡が来なくて、渉とはあの一件でしょ？ もうただショッピングしに東京来ただけになっちゃったんだよね」

二人はかつて、仲の良かった四人で顔を合わせて、小規模な同窓会を開こうと考え、東京に来ていたらしい。

ただそれは渉との一件で無くなり、終いにはいつまで経っても来ない颯人の返信が重なって、その計画は失敗に終わった。

「それは……なんか、本当にごめん……」

現況とかは抜きにして、楽しいことを計画してくれて、自分の元へはるばる東北から来てくれた二人に、渉は頭が上がりなくなった。

それに加えて、日向に対して下心ありありな考えをしていた自分自身に、怒りと情けなさを感じる。

「ううん……結局、颯人くんが忙しそうだし、四人が集まるのは無理だったと思うから……」
「日向はあんな事言われたのに優し過ぎるのよ……こいつはすぐ調子乗るから甘やかさない方がいいわよ」

瀬奈はきつい言葉で日向の言葉を否定したが、多少はいじりのつもりで言ったんだろう。ただ渉は、それが酷く懐かしく感じて、思えば直近でもそんな言葉を投げかけられた気がして、呆けた表情をした。

「瀬奈……確かそれ」

「なに？」

「昔も似たようなこと言ってたよな？」

「いや全く覚えてないし」

瀬奈と渉の言い合いを日向は眺めていた。少しだけ、ほんの少しだけ、羨ましいなと思いつつながら。

もう既に日は暮れていて、鳥の鳴き声やヒグラシの声が夏の夕暮れ時を際立てていた。学校から出た三人は、それぞれ予定を話し合いながら、青について各自で調べることにした。

「ありがとう瀬奈、颯人の連絡先くれて」

「別にいいわよそれくらい。なんか返信あったら連絡くれれば」

「一応、颯人くんにも青くんのこと聞いてみるね」

三人はいつでも連絡出来るようにメッセージのやり取りが出来るアプリ内の機能、グループ機能を使うことにした。勿論、そのグループには颯人も招待されている。

「じゃあ、またな」

「うん、またね！」

「じゃあね」

家路に着く帰り道、グループに表示されているメンバーを見て、三人は小学生の頃、四人で過ごしたあの日々を思い出していた。

普段は車で町内を行き来している瀬奈（ルビ・せな）だったが、今日はそんな気分では無かったらしく、徒歩で学校へと向かっていた。

渉（ルビ・わたる）と思わぬ所で出会い、日向（ルビ・ひなた）を呼び、青（ルビ・あお）という謎の少年を調べるべく学校にいた時間は、瀬奈の予想を遥かに超えたものだった。そのため、車で来なかったことを後悔する羽目になる。

別に彼女自身、歩くのは嫌いではないし遅くに家に着くことは、むしろ好奇心をくすぐられる良いものだったが、親はそれを許してはくれないのだ。

広い敷地に建つ白塗りの大きな建物。住宅街の中に建っているのも、瀬奈の家は他のものと比べて特に大きく広かった。

洋風チックな玄関を無造作に開けると飛び込んできたのは瀬奈の父親の低く注意する声と鬼のような形相。

「瀬奈、今何時だと思ってるんだ」

時刻は七時過ぎを差していて、外は日が長いこともありそんなに暗くはない。

「夏だしちよっとくらい大丈夫でしょ」

瀬奈は、履いていた厚底のサンダルを玄関に脱ぎ揃えると仁王立ちで立っている父親の横を通ろうとする。

「瀬奈！ まだ話は終わっとらん！」

しかし、その言葉と共に腕を掴まれ、瀬奈は怪訝そうに父親を睨んだ。

「なんだその態度は？ 今日という今日は、お前に宮野家の人間として一から説教をしないとイケないようだな」

「なに宮野家の人間として……だっさ」

掴まれた腕をほどこうとしながら瀬奈はキツイ口調で言葉を返した。父親はそんな娘の反応に慣れているのか、腕を握る力を強くして顔を近づける。

「夕飯の後、母さんとお前の今後について話し合うから覚悟しておくように。いいな？」

そう言っただけは廊下の突き当たり、リビングがある部屋へと消えていった。

「……ほんとくたばってくれないかな……」

そんな呪いのような言葉を吐いて、瀬奈は自室に続く螺旋状になった階段を上がっていく。

部屋に入った瀬奈は、壁際にある照明のスイッチを押さず、電気をつけようとしないうまま、ベッドに寝転んだ。

ふかふかの天蓋付きベッドに身を沈みこませていると、ふと階下から耳障りな声がして顔をしかめる。

「あの子にはもっと厳しく言わないと駄目よあなた」

「俺も言ってるんだが、どうにも治らなくてな。今日だって、小学校へ行くだけと言っていたのにこんな時間に帰ってきて……きつとどこかで遊び呆けていたんだろう」

「まあ、なんてことかしら……そんなのが宮野ビルディングの関係者に知られたら、瀬奈を社長にすることなんて出来ないじゃない！」

ヒステリックな母親の声がいつもよりも聞こえて、瀬奈は思わず耳を塞いだ。

彼女は親が有名会社の社長であるが為に、生まれた頃から会社を継ぐために育てられた。

一般教養、社交辞令、ビジネスマナーを覚える。その全てが瀬奈の幼少期の日常だった。

母親の身体がもう子供を作ることが出来ないとして知れて、父親は娘を立派な社長にすべく、

彼女の意見を聞かずに勝手に将来のレールを敷いた。

それがどんなに苦痛だったのか、瀬奈以外に知る者は誰もいない。

「……いいなあ」

ぼつりと呟いた言葉は、真っ暗で広い部屋の中にすぐ消えていく。

自身の夢を持って、それになんの迷いもなく生きていく涉達のことを彼女は、ずっと、ずっと羨んできた。

全て決められた人生の中で、やりたい事を見いだしてそれに向かっていく人達は、瀬奈にとつて憧れの存在で、とてもキラキラして見えた。

だから、やりたい事が出来る立場なのにも関わらず諦めた涉を許せなかった。

彼が専門学校を辞めたことをショックに思っていたのは、日向だけでは無い。瀬奈も同じくらい衝撃を受けていたのだ。

それを涉が知ることは無かったが、瀬奈はそれすらも飲み込んで、涉と日向がせめて昔のように戻るようにと画策した。

それは、勝手に羨んでいた涉に酷いことをして、最終的に関係を壊したことに對するささやかな反省だった。

離ればなれになっても、また前のように一緒に話したり遊んだりしたい。そんな思いは、瀬奈も一緒だ。

「はあ……本当になんで返信しないのよ」

ポケットに入れていたスマホを取り出して、瀬奈は颯人（ルビ・はやと）とのトーク画面を開く。そこには、自身が送った五件ほどのメッセージだけが新着順に出ており、颯人側のメッセージは随分前に途絶えていた。

「……会社まで行ったら、さすがに引かれるかな……」

寝返りをうって、枕に顔をうずめながら瀬奈は珍しく気弱な発言をした。

「そもそも、この前の東京に行った時も、帰ったらめっちゃ怒られたし……もう行けないかもな……」

唯一無二の親がこの世にいる限り、瀬奈の人生は変わらない。このままずっと、彼女はレールから外れることなく生きていくのだろう。

「はあ……今日はもう疲れた……」

少しずつ微睡んでいく感覚に身を任せて、瀬奈は深い眠りについた。

「じゃあ、夏休みは予定通り青のばあちゃん家に行くぞ！」

夏休みまで残りあと三日に迫った今日、放課後の教室で涉達は本格的に夏休みの予定を立てていた。この前の授業で決まった夏休みに行きたい場所は、十年に一度願いが叶うお祭りに参加するために、青の祖母がいる町になった。

「僕の場合に決まって嬉しい！……けど。ここから結構遠いんだよね……大丈夫かな？」

「そんなに遠いの？」

「うん……。僕が前に住んでいた町よりもっと北の方なんだ」

青の祖母が暮らしている地域は町というよりは、ほぼ村に近く、辺りを森に囲まれた集落だ。しかも徐々に過疎化が進んでいた。

当然、そこに住んでいる人たちは年配の人が多く、お祭りなどの地域の行事に参加している若い人は、ほとんど祖父母の元へ遊びに来ていた娘息子夫婦、又は孫くらいである。

だから渉達のように、他の場所からその祭りを目当てに来ようとしている人は少ない。

「そんなに遠いならどうやって行くか考えないとね」

颯人はトラブル無く安全に目的地に着く為の手段を考え出した。みんなも同じく、どうやって行こうか頭を悩ませている。

「一番はお母さんやお父さんに送って貰えたらんだけど……」

親に協力を仰ぐのも手だと日向は呟いた。その提案に周りは一様に頷く。ただ一人は首を縦に振らなかった。

「それじゃ駄目よ」

瀬奈はきっぱりとそう言い放った。

「なんでだよ？　これが一番安全で楽だし良いじゃねえか！」

すかさず渉が食ってかかる。

「これは言わば夏休みの課題でしょう？　それだったら大人に頼らず、自分達で自主的に行動した方がいいと思うわ」

最もらしい瀬奈の言い分に、安直な渉は勿論、日向も「確かに」と肯定した。

「でも僕達、子供だけでそんな遠い所まで行ったらきつと家族が心配するだろう？　やっぱり少しでも大人を頼るべきだよ」

颯人は自分達の立場をわきまえた上で、瀬奈の意見をやんわりと否定する。

「そんなの親に頼って、この計画自体を駄目って言われたらどうするのよ？」

「それは……。そんなことになったら、仕方がないから、新しい行き先を考えるしかないね」

「はあ？　もう先生に発表もしてるのに、今更変えるとか出来ると思ってるわけ？」

「やむを得ない事情があった場合は仕方ないだろう。それよりも焦って、勝手に行こうものなら事故やトラブルに遭いかねない」

渉と瀬奈ならまだしも、颯人と瀬奈が言い争いをしている光景は、とても珍しかった。普段、ブレーキ役となっていた人がいなくなり二人の言い合いは留まることを知らない。

渉と日向はどうか二人をなだめようとするが、周りの声が聞こえていないのか会話はヒートアップしていった。

「間をとって、僕の親が同伴するのはどうかな？」

青のその一言で、教室内に久しぶりに静寂が訪れる。

「間をとっていないし、結局大人に頼ることになるじゃない！」

「親御さんに迷惑をかける訳にはいかないよ！」

まるでボールを勢いよく壁にぶつけて、それが反動で跳ね返るが如く、瀬奈と颯人は一気に話し出した。

「うーん、実はね。今回の計画、僕の親も楽しみにしててね。もし駄目そうなら、みんなのお家まで行ってお願いしに行きそうな勢いなんだ」

まさか青の親までこの企画を楽しみにしているとは流石の涉達も予想外だった。

「……ふうん。愛されてるのね。まあ私はそれならそれで良いけど……今更、新しく考えてもめんどくさいし」

「親御さんが良いのなら、僕はもう何も言えないな……」

こうして、青の祖母がいる町に行く時は、青の親が同伴するという運びとなった。

ただ瀬奈はそれでも自分の親が許可をしてくれるはずは無いと踏んでいた。

瀬奈の両親は、娘に幼い頃から異常なほど様々な事を教えている。それは宮野家の人間として完成させる為に他ならなかったが、普通の人が学ぶ機会のない勉強や習い事といった学びの範囲を増やしてくれるのは彼女にとって自慢だった。

しかし、まだ幼い瀬奈はもつと自分の好きな事がしたかった。

白塗りの三階建ての建物は瀬奈の背丈の十倍はあり、いつも通り威圧感を放っている。

「ただいま」

両手でやっとなげられるくらいの両開きの扉に手をかけながら、瀬奈は淡々と自身が帰ってきたことを告げた。

「おかえりなさい瀬奈」

「早速、今日配られたプリント類があったら渡しなさい」

いつから待っていたかは知らないが、瀬奈の両親は二人揃って、瀬奈を簡単に通すまいと玄関に立っている。

「はい、お母さん、お父さん」

瀬奈は背負っていたランドセルからプリント類が入っているファイルを取り出すと、そこから、今日配布されたものを抜き出して渡した。

「もうすぐ夏季休暇が始まるだろう。その予定で話すことは無いかな？」

プリントを流し目で見ても、父親は顔を近づけてそう問いただした。

「夏休み初日だけ予定があります」

瀬奈は臆することなく、冷静な口調でそう答える。ただ、その一言で目の前の両親は呪いの言葉を浴びせられたの如く、衝撃を受けた表情で、娘の意見を即座に否定しにかかる。

「夏季休暇は勉強に励む為の期間だ！ それに遊びの予定を入れたのか？」

「ああ、初日からそんな予定を入れていたら、きつと夏季休暇は遊び呆けてしまうわ！」
しかし、それは予想内という様子で瀬奈は淡々と顔色を変えず話す。

「湯川くんの家で勉強会をするんです。夏休みの宿題をする為に」

遊びに行くのではないと主張した娘に対して、瀬奈の親は唸り声をあげると、その場で話し合いました。

三日後、夏休み初日。

明日賀屋（ルビ・あすがや） 駅で、渉と日向、瀬奈、颯人は落ち合っていた。

青の祖母がいる町、大名川町（ルビ・おおながわちちょう）は宮城の北側の方にあり、渉達が住んでいる町からはかなり遠い。

そのため電車に乗り、最寄り駅からバスと徒歩で行かないと着けないため、祭りが始まる時間には間に合うよう余裕を持って電車に乗りなければいけなかった。

向こうに着いたら、歩いて見て回ったりする時間も必要ということで祭りが開始する六時間前の電車に渉達は乗ろうとしている。

「実は俺、電車乗るの初めてなんだよね」

「あ、わ、私も……初めてなんだ」

「じゃあ慣れない事で焦ったら大変だし、先に買っておこうか」

「……………」

時刻は九時四十分。十時の電車に乗りなければいけないのに、未だに提案者の青はいない様子で、四人は各々、彼が来るまで電車に乗る準備を整えていた。

「……………」

「？ 瀬奈、どうしたの？」

「……………！ ううん、なんでもない」

瀬奈は三日前、親に言われたあの言葉を思い返していた。

『今回は大目に見てあげるけど、十八時までには帰ってくるように』

渉の家へ行くと嘘を吐いて、なんとか行く事が出来るようになったが、親の制約はまだ続いている。話に聞くと、願い事を書く紙を渡されるのは午後の三時かららしく、それを書いてすぐ帰れば間に合う計算だ。

ただ、もし少しでも門限を破ってしまったら夏休みは、ほぼ無いものと思って覚悟した方が良いだろう。

それくらい瀬奈は今日に賭けていた。

「しかし、青のやつ遅いなあ」

「ど、どうしたんだろうね……………」

時刻は九時五十分を過ぎていた。

流石に来るのが遅いとざわめき出す渉達。

駅には既に同じ時間の電車に乗ろうとしていると見受けられる人達がごった返している。

「間に合うのかな……………」

「ほんと何してんのよあいつ……………」

九時五十五分。九時五十七分。十時が刻一刻と迫っている中、渉達は遠くから走ってくる

一人の少年を見た。

「……ご、ごめん!! つはあ、はあ……遅れちゃっ……はあっ……て」

「遅いよ! 早く乗らないと間に合わない!」

「みんな、早く行くわよ!」

もうホームには電車が到着していて、今すぐにも出発して行ってしまうような雰囲気だった。

しかも反対側のホームには階段を上って、連絡橋を超えて行かないといけないため、五人は全力で走った。

プシューと音を立てて、ドアが閉まる音ともに、電車はゆっくり動き出す。

涉達は、息も絶えだえになりながら、ギリギリ乗り込めたことを確認するようにお互い顔を見合わせた。

「はあ……はあ……」

「……はあ、疲れた……」

「良かった……はあ……間に合って……」

「……あれ?」

各々、息を整える中、颯人は違和感がある事に気づいた。

「青……、親御さんは……?」

そう言われてみれば、先程青は一人で走ってきていた。青の親の姿など何処にもない。

「ごほっ……あ、実はね……急遽仕事が入っちゃって来れなくなっちゃったんだ……」

青曰く、今朝方に職場から応援を頼まれて青の母親は同伴出来なくなったそうだ。父親の方は前々から仕事の予定が入っていて、無理だと言うので青は仕方なく一人で駅まで向かったらしい。

「だから遅れてきたのね」

「うん……本当にごめんね……その、親が同伴するから許可を得てきてもらったのに……」
落ち込む青に、涉は彼の肩を叩いて首を横に振った。

「大丈夫だ! 俺達だけでも行けるってこと証明してやろうぜ!」

「そ、そうだね……!」

「その方がきつといいわね」

涉が言うとう日向も瀬奈も同調して頷いた。ただ、颯人だけはそれを不安そうに眺めている。

「……何も起こらないといいんだけど……」
ごんごんと小さな音を立てて、景色を塗り替えながら走っていく電車の車窓を見る。外は雲一つない晴天で夏を感じさせた。

一時間かけて電車の旅を楽しんだ五人は、目的地の最寄り駅である大名川町の隣町へ着いた。木造で出来た無人駅を出ると、すぐ前に大きな山々が見え、青い空に日がじりじりと照っていた。

周りは草むらと車が通れるほどの砂利道しかなく、涉達以外に人はいない。

「暑っついなあ……」

「熱中症対策しとかないとね」

夏真っ只中。まだお昼前の空でも太陽はきらきらと輝いて気温をどんどん上げていく。

「ここからバス停までどれくらいかかるんだっけ？ 青」

「大体一時間ぐらい……かな。結構歩くよ」

「まーじかあ……」

見た感じ、民家が点々としているぐらいでコンビニといったお店が見当たらないほどの田舎町。唯一あるのは、野菜の無人販売所ぐらいだろうか。

「飲み物が無くなっても途中で自販機とかがあれば良いんだけど」

「そうね。もしこんな所で倒れたらきつと助けは来ないわよね……」

「怖いこと言うなよ!？」

しかし実際問題、この炎天下の中、五人全員が倒れたりでもしたら命の保証はないだろう。

「みんな、こまめに水分補給を摂ること。体調が悪くなった人は逐一言っつてね」

颯人は班長としてみんなに注意すると、班員は大きな声で返事をした。

四十分ほど歩いたあたり、空にある太陽はほぼ真上に来ていた。最初はお喋りをしたりはしゃいでいた五人は、疲れてきた様子で歩く速さも遅くなっていた。

「……みんな、大丈夫?」

「だいじょーぶ……」

「はあ……本当暑いし遠いわね……」

笑顔が消えて、楽しい話題も尽きて、夏の暑さと蝉の煩い鳴き声ばかりが耳に届く。

五人は気が滅入り始めていた。そんな時……。

「あ!」

ぽつんと雨粒が渉の頭に当たって、それからなだれ込んでくるように次々に雨が降り始めた。先ほどまで雲一つない青空だったのが嘘みたいに、曇天が頭上を覆いつくしている。

「最悪! 雨が降るなんて聞いてない!」

「今日の天気予報では一日、晴れだったのに……!」

道の真ん中、傘も持っていない五人は雨ざらしになり、慌てて何処か雨宿りできる場所はないかと走り出した。

肩から下げたカバンを頭に乗せて、少しでも濡れないようにするも、雨の勢いが強すぎてほぼ意味をなしていない。周りには建物らしいものはなく、田んぼと若干、木が生えているばかりである。

「あそこに逃げよう!」

渉は前方に見えた他の木より幾分か大きな木を指差した。

大きな幾数枚の葉が屋根のように覆ってくれるその木は近くで見ると更に大きい印象を受けた。五人はがらがら駆け込んで、息を整える。

「……げほっ……ごほっ」

「大丈夫？ 青くん？」

「うん平気……！ 少し水が口に入ったみたい」

「にしても本当最悪ね」

雨の脅威を免れたが、五人はこの場所から一步も出れないといった状態になってしまった。未だ、勢いを留めることを知らずに空は多くの雨粒を流している。

「暑いとは言ったけど雨に当たりたいとは言ってねえよ！ ばーか！」

木の幹で不機嫌そうに座っていた渉がいきなり大声で叫んだ。

「急に大声出さないでよ！ 耳が壊れるでしょう!？」

「はあ！？ 瀬奈も人の事言えねえだろうが！」

狭い木の下で言い合いを始める渉と瀬奈に、他の三人はなだめる気力もないのか疲れた様子で見ている。

「……雨、いつやむのかな」

「分からない。……傘を持ってくればよかった……はあ、僕としたことが……」

「しょうがないよ……テレビでも言っただから」

後ろで言い争いをする二人の声は激しく降る雨の音で少しづつかき消されていく。

いつの間にか渉と瀬奈も怒る気力すらなくなったのか、三人と同じように静かにただ降りゆく雨を眺めていた。

「……日向」

何分かそうして黙っていた瀬奈はふと何かを見つけて、日向の名前を呼んだ。

「どうしたの？ 瀬奈ちゃん」

「あの花、ユリって言う花よね？」

瀬奈の視線の先には、ちょうど木陰に入るか入らないかという場所に白い花が一輪、雨に濡れて咲いていた。その隣には別の紫色をした花がこれまた一輪咲いている。

「そうだね。あれはユリだよ！ 覚えてくれたんだ」

「……うん。この前教えてくれたからね」

瀬奈は花の所までいくと白いユリではなく、その隣の紫の花の前でしゃがんだ。

「その紫の花はねキキョウっていう花なの」

日向も瀬奈と同じように花のそばまで寄って花を眺める。

「キキョウ……綺麗」

「綺麗だねえ……でもこの木の近くじゃ十分な栄養を貰えずに枯れちゃうかも……」

日向がそう言うと瀬奈は表情を一変させた。

「ほら、この子たちの周りに咲いている枯れた花たち多分ユリとキキョウだよ」

見るとそこにはユリやキキョウの形をとった枯れた花が横たわっている。

「……このままここにいたら枯れちゃう……」

「瀬奈ちゃん？」

「そんなの可哀想よ……！」

瀬奈は手でキキョウの根元を掴むとそのまま引っこ抜いた。

「あっ！ 瀬奈ちゃんそれは……！！」

日向は咄嗟に瀬奈のやったことは花の命をむしり取ることだと伝えようとした。しかし、瀬奈の行動は決して、悪意のあったものではなくただただその場所で枯れてしまうのが悲しくて、してしまっただけのことなのだ。

それを間近で感じた日向は、その先を言うことを躊躇った。そして、自分も同じようにユリの根元を掴んで。

「一緒にもっていこう。これできっと寂しくないよね」

丁寧に慎重にユリを引っこ抜くと微笑んで見せた。

「そうね……！！」

瀬奈も同じく微笑んだ。

気づけば雨脚は弱まって、分厚かった雲間からは細く光が差している。小雨がぱらぱらと降り、木の葉の隙間からは暖かな光が五人を包んでいた。

「皆！ あれ見て！」

先程は雨で良く見えなかった視界の先に、佇む建物を青は発見した。民家とは少し違った様子その建物は、よく見ると入口付近に色とりどりの何かが設置されている。

雨が上がったことによる安堵感と新しいものを見つけた喜びで涉達は、一斉にそこへ向かって走り出した。

雨上がりの草木の香りがして、徐々に太陽が姿を現していく。蝉が再び鳴き始め、地面を蹴る子供たちの足音が聞こえた。

「これって！」

入口にあった色とりどりの何かは、どうやらガチャポンだったらしく何やらヒーロー物のグッズが入っていた。そして、その建物自体には小さく駄菓子屋と書いてある。

「駄菓子屋だ！」

「入ろう入ろう！」

珍しく瀬奈は、目を輝かせて店に勢いよく入っていく。それに倣って涉、日向と青と颯人が順に入っていた。

その駄菓子屋は、どうやら普通の家と合体している様子で中は思ったよりも広かった。

こんなにやくゼリー、きびだんご、指輪飴、わたがし、ラムネ、棒アイスといったものが所狭しと並べられ、きらきらと輝いて見える。

「おや、珍しいねえ……こんなに子供が来てくれるなんて」

奥から出てきた駄菓子屋のおばあちゃんは、嬉しそうに顔をしわくちゃんにさせて笑った。

「これとこれとこれ！ 下さい！」

「青！ 棒アイス分けようぜ！」

「ありがとう涉！」

「日向、それ何？」

「指輪飴とキューブ飴とペロペロキャンデーだよ！ 颯人くん！」

駄菓子を選んでる間に先程までの疲れは一気に吹き飛んだようで、わいわいと駄弁りながらお菓子を食べる五人。

「どこから来たんだい？」

おばあちゃんは優しそうな顔で微笑みながら問いかけた。

「明日賀屋！」

「ああ、随分遠いところから来たんだねえ……大変だったろう」

「僕達、大名川町のお祭りに行くんです」

気前のいい駄菓子屋のおばあちゃんは、涉達が大名川町に行こうとしていることを知ると、あと少し行ったらバス停があると教えてくれた。

お菓子をまだ買いい足りない様子の瀬奈と日向が店内にまだいる中、残った三人の男子はお店前のベンチに座りながらアイスを食べている。

「お！ そういやこのガチャポン、ヒーローのやつだったよな！」

そう言って涉はガチャポンの前へ行くと、百円玉を入れて錆び付いたレバーを倒した。

「涉は本当にヒーロー好きだねえ……」

「だって、かっけえじゃん！ ほら見ろよ！」

当たった戦隊モノのミニチュアは赤いヒーローだった。

「ほんと！ かっこいいね！」

晴天の空を背景にガチャポンのグッズを持ち、満面の笑みを浮かべる涉に向かって、青はそう言った。

「じゃあ気をつけて行くんだよ」

駄菓子屋のおばあちゃんに見送られ、涉達はバス停まで歩き出した。おばあちゃんの言っていた通り、本当に歩いてすぐバス停と思わしき場所がだだっ広い平原にぽつんとある。

「もうすぐで大名川町に着くな！」

「うん！ バスの時間もあともう少しで来るみたいだし、良かった！」

「何事もなく着けそうで本当に良かったよ」

すっかり元気を取り戻した五人は、数分後にバスが来るまで他愛もない話をしていた。

「なあなあ、そういえばみんなは願い事は何書くか決まったか？」

「もちろん！ 涉は？」

「そりゃあ、俺は夢が叶いますようにってお願いする！ まあ絶対、叶えるけどな！」

自信満々にそう答える涉に、皆は笑った。きっと誰もが、彼なら絶対叶えるだろうと思っているのだろう。

「みんなの願い事はなんだ！？」

「教えない」

「な、内緒かな」

「僕も言わないでおこう」

「秘密！」

誰も一切教えようとしなのは想像していなかったらしく、渉は驚きの声を上げた。

「いやいや、ちょっと待てよ！ 不公平だ！」

どれだけ騒いで聞いても、結局バスが来るまで誰一人も自身の願い事を明かしてくれなかった。

バスに乗って段々と大名川町が近づいてくるうちに、皆のテンションは少しずつ上がり、いよいよお祭りだという雰囲気は吞まれていく。

大名川町は、先程の最寄り駅周辺と何ら変わらない景色が広がっていた。ただ違う所を挙げるとするならば、町全体が山に近く坂が多いという事だろうか。

バス停から歩いて数分、急な登り坂を歩いて行った先に、青の祖母の家がある。

「おばあちゃん！ 連れてきたよ！」

青が家の玄関を開けてそう言うのと、青の祖母はゆっくりと廊下を歩いてやってきた。

「本日は急なお願いを承諾して頂き、本当にありがとうございます！」

「「ありがとうございます！」」

班長の颯人の合図で、挨拶をすると青の祖母はにっこり笑って。

「まあまあ、こんなにお友達をいっぱい連れて、今年のだ名川祭りは賑わいそうなのう」とても優しそうな声でそう言った。

神木の根元に埋める紙は事前に配られるらしく、前々から連絡していたということでの祖母はしつかり五人分の紙を頼んでくれていた。

紙を埋める時間が始まる午後三時には間に合うように、各々筆記用具を引っ張り出して、紙に願い事を書いていく。

『願いが叶いますように』決して上手とは言えないが丁寧に、そう書かれた紙は何処か不思議な雰囲気を感じ出している感じがした。

自分のものだと分かるように瀬奈と日向は道中で摘んだ花を紙にくっつけて、渉は紙に絵を描いた。

各自、願い事を書き終わり、いよいよお祭りに行こうとする中その事件は起こる。

アクセル音が遠くから聞こえて、坂の一番上にある青の祖母の家の敷地内に、鋭い悲鳴のようなブレーキ音を出しながら一台の車が入ってきた。

パツと見、あまり見かけないもの、高級車の類だろうかと感じさせるその白い車から、一人のガタイのいい男性が降りてくる。

それを見た瀬奈は暫く絶句した後、絞り出すように声を発した。

「お父さん……………」

それは瀬奈の父親だった。彼は、瀬奈を見つめるや否や大きな声で怒鳴り出した。あまり

に衝撃的で恐怖を感じた瀬奈は、一瞬何も聞こえ無くなってしまった。

どうやら青の親が同伴出来なかったことを謝りに、各家庭に電話を入れたらしかった。そして、そこで初めて娘が嘘をついていた事を知った瀬奈の親は激怒し、涉達の親に今すぐ帰らせろというような内容の電話をしたらしい。

涉達の親も続々と迎えに来る中、瀬奈はただただ泣きじゃくる事しか出来なかった。自分のせいで、全てが台無しになったことだけが悔しくて、他のみんなに申し訳が立たなくて、父親に叩かれた頬の痛みよりも、心の痛みの方が何倍も痛かった。

* * *

ピピピとスマホのアラームが鳴って、瀬奈は目を覚ました。いつの間にかお風呂にも入らず眠ってしまった事に気づく。

その直後、先程見た夢の内容がフラッシュバックしてきて、彼女の思考を覆い尽くしていた。

「思い……出した……」

そう辿々しく言葉を紡ぐと、瀬奈は勢いよくスマホを手に取り、昨日作ったばかりのグループにメッセージを送った。

『青のこと思い出した』

普段は絵文字やら顔文字を駆使したメッセージじゃないと送るのを躊躇うくらいなのだが、その時の瀬奈は一刻も早く伝えたくて気持ち先走っていた。メッセージにはすぐに既読が二件つき、ほぼ同時に日向と涉から返信が来る。

『本当！？』

『夢を見たのか！？』

瀬奈はそのメッセージを見ながら、素早くキーボードをタップしていった。

『うん、夢の内容は後で話す。二人とも今日空いてる？』

その問いにも一瞬で既読がつき暫くして返信が来る。

『勿論！ なんなら今日でもいいぜ！』

『私も今日、休みだし大丈夫だよ！』

期待通りの返信に瀬奈は内心ほっとした。

瀬奈は青の事を思い出したついでに、あの頃抱いていた両親への恐怖を思い出して泣き出してしまいそうだったのだ。ただ、その恐怖は涉たちとメッセージのやりとりをしていくうちに溶けていき、代わりに熱を持った怒りに変わった。

生まれてこの方、ちゃんとした抵抗を見せていなかった彼女はここ数日の昔馴染みとの再会や幼いころの夢で、自身を奮い立たせる。

今日のこの日、彼女は初めて親に何も言わず家を出て、会社ではなく友達の家へと向かった。

親にバレないように直接、親と関係のない部署に有休を使うことを連絡し、急ぎ家を出る。幸い、今日は午後からの出勤だったため助かった。

『場所は明日小(ルビ・あすしよう)前ね』

少しの緊張と初めて反抗らしい反抗をした高揚感でないまぜになった感情で、瀬奈はメッセージを送った。

車で明日賀屋小学校前まで向かった瀬奈は、先に着いて話をしていた渉と日向に軽く挨拶を済ますと今朝見た夢の内容を二人に話した。細かい部分、特に瀬奈の親が来たあたりは省いて、願い事を書けずに終わったということを告げる。

「そうか……そんなことがあったのか……」

「結局お祭りに行けなかったんだね……」

残念そうに肩を落とす日向を励ますように、瀬奈は口を開いた。

「でも、これで重要な手がかりが得られたわ」

「え？ どっかにそんなものあったか？」

「なにになに？」

瀬奈は、夢に出てきたある場所を思い浮かべながら、その地名を口にした。

「青のおばあちゃんの家がある大名川町。そこに行けば、きっと青がいたってこと証明出来る気がするの」

大名川町。宮城県の北側に位置し、古いしきたりと特別なお祭りの伝統が続く田舎町だ。

過去に渉達はその場所へ足を運び、夏休みの思い出を作ったはずだった。

「大名川町か……確かに行ってみる価値は十分あるな！」

「うん！ もしかしたら青くんのおばあちゃんに会えるかもしれないよね！」

やっと手がかりを得られたことにホッと安堵し、渉と日向は喜びの声を上げた。

「ええ、早速だけど今日にでも——」

ピロン。

「ああ、悪い」

軽快な音と共に渉のスマホが鳴った。通知をオフにするついでに渉は、通知の内容を確認して固まる。

「どうしたの？」

スマホの画面を凝視して息を吸うことも忘れている渉に気づいた瀬奈は、質問ついでに端末を覗き見た。

メッセージアプリのポップアップ通知。それは崎川颯人という人物から送られていた。

『もう死のうと思ってる』

そんな十一文字の言葉を瀬奈は理解出来ずに、何度も何度も繰り返し繰り返し頭の中で

反芻(ルビ・はんすう)する。

「え……？」

ようやく意味が分かった彼女は、ただそれだけの声を出すのにも精一杯だった。

空が次第に分厚い雲に覆われ、突き刺すような音を立てて突然雨が降ってきた。

東京都のオフィス街近くのマンション。三十平米の広々としたワンルームは、ベッドソファと木のローテーブルが置かれ、その下に紺のカーペットが敷かれている。

パツと見、お洒落で清潔感のある部屋の中で一つ、異様な物がぶら下がっていた。

天井に無理やり突き刺した鴨居(ルビ・かもい)フックから太いロープが垂れている。そのロープを両手で掴み、スーツを纏った颯人(ルビ・はやと)は無機質な目で空(ルビ・くう)を見つめながら、昨日見た夢のことを思い出していた。

一番印象に残っているのは瀬奈(ルビ・せな)の泣き叫ぶ声だ。

物凄い大きな声で怒鳴り散らす背の高い大人。瀬奈の父親と思わしきその人は、娘をひっぱたいて、泣きじゃくって過呼吸になっている彼女の腕を引っ張ると、まるで誘拐するかの如く車に連れ込み、瞬間に走り去ってしまった。

日向(ルビ・ひなた)も渉(ルビ・わたる)も青(ルビ・あお)もその様子を見て泣きだしてしまっただけで、それぞれの親たちが迎えに来たときは、何かに怯えながら子供たちが泣き叫んでいるという阿鼻叫喚の光景が広がっていた。

そんな中、颯人だけはなんとか身体をがたがたと震わせても、呼吸を乱しても、必死にこの状況をどうすればいいか考えていた。

颯人は幼少期から周囲の大人に期待をかけられて生きてきた。家でも学校でも自分の立場と親や先生の意図を理解するのが上手で、言われればなんでもその通りにやってのけてしまえるほどの子供だった。

だから今回の事件で颯人は、みんなをまとめる仕事をしていた自分自身を責めた。

「ごめんなさい……ひっぐ、許して……! もうしませんからほんとうにごめんなさい!」泣きながら謝り続ける瀬奈の声は颯人の頭の中で何度もループし、皆の泣きじゃくる声と叱る大人たちの声が冷静な思考を奪っていく。

もう渉と日向が親に連れられて帰っていたことにも気づかず、颯人は繰り返し自分を追い込むように責め立てた。

どうすれば許されるのだろう。どうすれば責任を取れるのだろう。どうすれば大人達の期待を裏切られずにいられるだろう。どうすればどうすればどうすればどうすればどうすれ

ばどうすればどうすれば。

「お前のせいだよ青」

気が付けば颯人は青の頬を叩いていた。

勢いよく地面に尻もちをついた青は叩かれて赤くなった頬に手を当てて、涙を流しながら放心する。

「お前がこんなところに行こうなんて言わなければこんなことにはならなかったんだ」

冷たい目で青を見下ろしながら颯人は淡々と言葉を紡いでいく。自分自身を責めすぎたおかしくなってしまった彼は、もう止まらなかった。

「お前が転校してこなければこんなことにはならなかったんだ。お前のせいで、瀬奈も涉も日向も親に怒られて、泣いて辛い思いをする羽目になったんだ」

颯人は願いの事書かれた紙を青の目の前でびりびりに引き裂いた。そのまま紙片は目の前に落ちていく。

「こんな願い事なんかしても意味はなかったんだ！」

青は颯人がそう言い終わると同時にさらに涙を流して叫んだ。息を吸う間もなく次々と溢れてくる涙、止まらない嗚咽。段々その嗚咽は過呼吸特有の呼吸音へと変わり青は苦しうに胸元を抑える。

「……っあぐ」

「お前のせいだ……全部！ お前のせいだ！！」

「げっほ……ごほごほ……ひゅー……ひゅー……」

青が激しく咳をして、その直後地面に倒れた。青の祖母は血相を変えて青の身体を起こそうとする。しかし、いくら揺さぶっても彼の目が開かれることはなかった。

それを酷い耳鳴りの中、颯人はただ見ていた。

「青が転校することになりました」

夏休みが終わり、先生は朝のホームルームでそう告げた。

涉達は何故かわからないといった感じで、ただただ残念そうに悲しそうに肩を落とすばかりだった。

その数日後、颯人は偶然、青の両親と担任の先生が話していたことを聞いてしまった。

「今日、病院で息を引き取りました」

青は幼い頃から重めの喘息を患っていて、最近はいよいよ治ってききたらしいが夏休みのあの日、再度発症し病院に緊急搬送されたらしい。

その後、学校は本人の意思で転校という形で退学。暫く入院と退院を繰り返していたが、今朝方、突然息を引き取ったという。

ショック。そんな言葉では語れないほどの衝撃が颯人を襲った。

青が死んだのは自分のせいだと当たり前のように痛感して、その思考がこびりついて離れなかった。

颯人は優等生で今まで失敗なんかしてこなかった自分が、人を殺してしまったという事実に耐えられなくなった。だから、彼は出来るだけ青のことを忘れようと努力した。これはまだ幼い颯人がとった精一杯の現実逃避だった。

一切、彼の話題を出さずに暮らしていれば、最初は毎日、青の話をしていた周りも案外話さなくなっていた。こうして、青という存在はほとんど忘れ去られていったのだ。

* * *

カーテンで閉め切った窓の外から鋭いクラクション音が聞こえて颯人は我に返った。今一度、過去の自分がしたことを思い返してみれば、確かに最低なものだ。

ブラック会社から任される激務の数々、仕事をこなしてもこなしても終わらない地獄のような日々。おまけに完全に忘れていたはずの彼のことを突然思い出した友人達、そしてトラウマを抱えた過去を追体験するような夢。

そんなすべてがここ最近で積み重なりあつて抱えきれないものになっていた。

そうして颯人の精神は燃え盛る芯の細い蠟のように危ういものとなる。

封をしてもう二度と開けないと誓った記憶が、いつの間にか誰かに無理やりこじ開けられた。それは様々なことが度重なった颯人に自死を決断させるきっかけには十分だった。

「涉達に謝る機会、失っちゃったな……」

体重がかかって途中で切れたりしないか、ロープの強度を確かめながら虚な目で呟く。彼の後悔は色々あるが、恐らくそれが崎川颯人として最期の心残りだったのだろう。

もう後は首にロープをかけて、今立っている椅子を蹴り飛ばすだけで楽になる事が出来る。恐怖心をいつも通り何処かへ仕舞った颯人は、臍げな意識でロープを首にかけた。

「ね、ねえ本当にここで合ってるのかな!？」

「颯人の会社まで行って調べたのよ!？ 合っていないと困るわ!」

「でもどうやって入るんだ!？ 都内だしセキュリティとか嚴重だろ!？」

涉達は颯人からの連絡を受けた後、大急ぎで新幹線に乗り東京までやってきた。幸い、颯人が働いていた会社は知っていたので、そこで彼の住所を聞き出したのだった。

颯人は先日会社を辞めたらしく、既に会社にいない人にプライバシーの保護は効かないから大丈夫だろうと笑いながら受付のおばさんが教えてくれた。緊急事態なため、今の涉達にとっては有り難かったが、これがもし平常時で何らかの危害を加えるために第三者が聞き出していたらと考えると、だいぶ管理がずさんな会社だ。

颯人が住んでいると教えられたマンションは都内の割と大きなマンションだった。つまりは容易に第三者が入り込むことが出来ないセキュリティが施されていると考えるのが妥当だろう。

「友達の命の危険があるかもしれないのに、セキュリティなんか気にしてられない!？」

通報されようが扉をぶち壊していくまでよ！」

「やめろ！　いつものお前らしくないぞ！」

「落ち着いて瀬奈ちゃん！」

本当に今にもセキュリティロック式の自動ドアを壊しそうな勢いの瀬奈に、慌てて日向と渉は止めにかかる。

エントランスがあまりにも騒がしいので様子を見に来たマンションの管理人と思わしき若めの女性は、二十歳ぐらいの人たちが修羅場のような光景を繰り広げているように見えて、もつと言えば二股をかけた男を殴りかかろうとする遊びの彼女とそれをなだめる今の彼女に見えて啞然とした。

「こんな所でなにやってるんですか！？　修羅場なら外で——」

「か、管理人さんですか！？　一大事なんです！」

「い、いい今、友達が死にそうで！」

声をかけるや否や食い気味にかかってくる渉達に、一瞬女性は後ずさった。しかしその後、二股とは明らかに関係なさそうな話題が聞こえて確かめるように問いかける。

「友達が……死にそう？」

渉達はその言葉に真剣な眼差しで深く頷いた。

椅子を蹴り飛ばそうとした途端、ガチャンと玄関の方から乱暴に鍵を開けたような物凄い音がして颯人は驚きのあまり椅子から転げ落ちた。部屋には大きな音が響き、勢いよく尻もちをついてしまった颯人は天井で揺れるロープを見上げた。

「(咄嗟にロープを首から離れたのか……？　覚悟はあったはずなのに……)」

そんなことをぼんやり思っていると玄関の方からばたばたと複数人の足音がして、颯人は我に返る。

「颯人！　死ぬな！」

「颯人くん！」

「颯人！！」

部屋の扉を開けて飛び込んできたのは渉だ。その後すぐに日向と瀬奈が入ってくる。

「……みんな……なんでここに……？」

掠れた声で颯人は三人を見上げた。久しぶりに見る顔は小学生の頃の面影を残していて、酷く懐かしく感じる。

「あんなメッセージが送られてきたら誰だつて来るに決まってるんだろ！？」

「私達のこと、友人を見捨てる薄情者だとも思ってたわけ！？」

「みんな心配してきたんだよ！　薄情者なんかじゃないよ！」

一斉に答え始める三人に、颯人は口を開いて目を瞬かせた。

「颯人……、話してくれとは言わないけどさ」

渉は未だ、床から立ち上がろうとしない颯人に目線を合わせようとしやがんで話す。瀬奈

と日向はそれを静かに見守っていた。

「もっと早くに言っただけ良かったな。……死にたいとか、辛いとか、お前思っても言ったことなかったろ？」

優しい声で、悲しそうな表情で渉はそう言った。

「渉……………」

「そんなに完璧じゃなくても良いんだよ。逃げてても良いんだ。逃げた先が悪いことばかりなんて……………決まってることでもないしな」

へへっと人差し指で鼻を擦りながら、少年の様に照れ臭そうに笑う渉。それを聞いていた颯人の目には少しづつ光が宿っていく。

「そうね。流石、夢を諦めて逃げてきた奴の言うことは違うわ」

瀬奈の言葉は嫌味だったらしかったが悪気があって放ったものではない。

「……………夢？ 漫画家になる夢をやめたの……………？」

ただその告白で心底驚いた颯人は、目を丸くしながら瀬奈と渉の顔を交互に見る。

「あーうん……………色々あって、逃げちゃってさ……………でも」

渉は日向や瀬奈の方を見上げて、一呼吸した。そして、今までのことを思い返す。

思えば、ここ最近で本当に沢山の事が渉を中心に起こっていった。夢への挫折から始まって、ズルズルと引きずって断ち切れないままだった未練は、瀬奈の暴露で泡になり、日向との関係も消えていく……………かのように思えた。

でも蓋を開けてみれば実際は、今まで思っていたことをお互いぶつける事が出来たし、関係も、人生も、全てが**灰塵（ルビ・かいじん）**となるわけでもなく、渉は新しい心持ちで生まれ変わったのだ。

「でも、俺の人生は終わらなかつたよ！ こんな俺でも変わらず接してくれた日向や瀬奈がいてくれたし……………颯人にもまた会うことができた」

心底そう思ってるかのように、大事そうに、大切な宝物をそっと誇らしげに自慢するように、渉は笑った。

「……………」

それでも颯人は自分には分からないという面持ちで、まるで眩しい太陽を仰ぎ見て決して手が届かぬものを見るような眼差しで渉を見た。

「渉は逃げる勇気があったようだけれども、僕にはそんなもの無かつたよ。僕には、そんな大層な考え方も出来ないし、本当の僕を知ったらきつとみんな幻滅する」

本当の僕——、それは青を死に追い込むほど罵倒を浴びせていたあの日の颯人。未だ閉じ込めていた醜い自分。

「颯人、勇気は人それぞれで良いのよ。だって、人によって得手不得手あるものではないか？」
瀬奈は呆れた物言いの裏に優しさを孕んで、そっと寄り添うような口調で話す。

「苦手なことを習得する努力も必要だけれど、それはいつだって良いの。颯人、あんたにとって好きなこと、得意なことと生きていきなさい」

目に浮かんだ涙を取り繕わず瀬奈は、黒髪をかきあげながらそう言った。

「……でも、僕にはそんな、そんな言葉をかけて、貰える……価値、なんか……」

震えた颯人の声は途切れ途切れになり、上手く言いたいことを言えない様子だ。

「自分を卑下しないで……颯人くん。私もよくしちゃっていただけで、でも、それで良いことなんて何も無かったよ。それに例え颯人くんが自分に自信がなくなっても、ここにいる皆はきっと颯人くんを誇らしく思っているよ」

日向がそう言い終えると、瀬奈と渉は力強く頷いた。

「……なん……か、ずるいよ……みんなして」

ぼろぼろと颯人の目から透明な水滴が流れてきて、声を抑えるようにして彼は泣いた。

「颯人」

「な……に？」

「今まで、沢山よく頑張ってきたよ……。もう休んでも大丈夫だ……お前は十分に俺たちの班長だったよ」

颯人の髪をわしゃわしゃしながら、にっと笑う渉。それをきっかけに、耐えきれなくなつたのか颯人は声を上げて、子供のように泣きじゃくつた。

それはあの日、皆が泣いている中で必死に泣かないよう我慢した分の、彼の子供の頃の話だったのかもしれない。

颯人が泣き止むまで、三人は何も言わずただただ見守り続けた。四人は再び、あの頃のように一緒にいることが出来たのだ。

いつの間にか雨は止んで、雲間から若干だけ日差しが差している。外は都会の喧騒と蝉の声が聞こえ始め、止まった世界が動き始めるように思えた。

「何はともあれ、また四人で会えたわね」

「そうだねえ……こんな形になるとは思わなかったけど、また会えた」

「とりあえずこれ片付けるからな 颯人（ルビ・はやと）」

自殺用に準備していたロープや椅子は早々に渉（ルビ・わたる）達に撤去され、今や無理やり天井に空けた穴だけが空虚に残っている。

「あつという間に終わっちゃったなあ……」

先ほどまで自分がしようとしていたことを振り返って、未だ生きている実感が湧かないのかぼーっと天井を見上げる颯人。

「……なあ颯人、聞いてもいいか」

「……うん」

渉は同じように天井を仰ぎ見ながら、隣にいる颯人に訊ねる。

「青（ルビ・あお）のこと覚えてたりするか？」

それは今までの颯人にとって一番、聞かれたくない質問だった。もう忘れたという思いで今日まで生きてきた彼にとって、その名前は禁句のようなものだ。でも颯人は、この選択をした。

「覚えてるよ。……夢で見る前から、本当はずっと覚えていたんだ……僕も気づいていなかっただけで」

何度忘れようとしても、心のどこかに彼はずっといて、いなくなることはなかったのだから。

渉が逃げる勇気なら、颯人は告白する勇気だ。彼は今まで抱え込んでいた全てを吐き出す決意をしたのだった。

あの夏の日にあったこと。

自分が犯してしまったこと。

その後、聞いてしまったこと。

その全てを颯人は三人に話した。

「僕が青を殺したんだ」

嘘とも真実とも言いきれないその言葉を渉は、真摯に受け止めた。間違っても、勇気を出して告白してくれた彼を否定したりはしなかった。

瀬奈も日向も決して批判することはなかった。今までこんなに大きなものを背負っていた彼を尊重するような態度で静かに見守っている。

「颯人、話してくれてありがとうな」

「ううん……全然良いんだ」

「なあ、颯人」

「……どうしたの？ 渉」

渉は颯人に向き直ると、静かに呟いた。

「俺はお前のしたことを絶対に責めたりしないし、日向（ルビ・ひなた）も瀬奈（ルビ・せな）もそうだ。もうこれからは背負わなくて良いんだよ」

決して揺るがない真剣な眼差しで、かつて迷っていた自分と颯人を重ねるように渉は言う。

「当たり前じゃない。あんたは何も悪くないわ」

「私たち知ってるよ……！ 颯人くんがとても優しい人だってこと」

瀬奈は穏やかに笑うと悪くないと言いながら首を横に振った。

日向は拳を握り締めて、言い聞かせるようにはつきりと言葉を放つ。

「俺は、俺たちは、お前を許すから、お前も自分を許してやってくれ」

いつの間に部屋の窓が開いていたのか、カーテンが風で揺れ、差し込んだ夏の日が四人を照らした。きらきらと暖かな景色に、颯人の瞳は光を帯びる。

「……そんなことを言われたら、断れないじゃないか」

そしてあまりにも太陽の光が眩しかったのか、涙を一筋流した颯人はとても幸せそうに笑った。

その時、一気に夏風が吹いた。

カーテンが風に舞い、室内は沢山の光に満たされる。

「——青い」

目に映った景色は、雲のない満天の青が広がっていた。



——とある森に囲まれた神社の裏。

建物の屋根よりも高く大きな神木の根元に、掘り出したばかりの木箱が置かれている。

木漏れ日の差す箱の中には、花卉がついた紙が二枚とヒーローのようなものが描かれた紙が一枚、セロハンテープで直した破かれた紙が一枚。

そして何も変哲のない五枚目の紙には。

『みんなの本当の願いが叶いますように』と書かれていた。